



校歌

作詞 寺田 彰司

- 一 千秋の雪積もりたる
富士の高嶺の雄姿ぞ
幾万代の後までも
変わらぬ誠の鑑なる
変わらぬ誠の鑑なる
- 二 奔流百里石をかみ
巖に激しいや増しに
勢加わる利根の水
これ剛健のためしなり
あ、此の山と此の川と
日夕眺むる健男児
自然の示す巨人をば
如何に学ばん習わなん
- 四 白幡台の雪月花
四季の折々常総の
平野にしるく輝くは
高潔無垢の別天地
石段登る六十余
一足ごとに踏みかため
心を鍛え身を練りて
忠良有為の基たてん



目次

会長挨拶	2
校長挨拶	2
平成26年度総会報告	3
平成27年度総会案内	4
同窓会だより	4
母校の想い出	6
母校と私の人生	11
多士済々	13
トピック	15
所蔵美術品紹介	16
県立歴史館展示	16
訃報・弔辞	17
叙勲・褒章	17
横溝正史ミステリ大賞受賞	18
長崎国体優勝	18
第二回旧職員会	18
同窓会会員名簿発行	18
事務局から	19
SSH事業	19
進路だより	20
先輩の語る仕事を聴く会	20
職員室だより	22
部活動状況	22
ユニフォーム贈呈式	22
部活動奨励金贈呈式	23
キャリア教育の推進	23
キャリアアサポートプラン	23
性に関する講演会	24
生活体験発表会	24
定時制奉仕作業	24
編集後記	24

竜ヶ崎第一高等学校内
白幡同窓会事務局

〒301-0844 龍ヶ崎市平畑 248
TEL 0297-62-2146 FAX 0297-62-9830
ホームページアドレス <http://www.ryugasaki1-h.ed.jp/>
印刷所：倉沢印刷(株) 題字：秋山海堂(中21) 表紙写真：齋藤佳郎(高8)

ご挨拶

白幡同窓会会長
齋藤 佳郎

白幡同窓会会員の皆様には
ますますご清祥にてご活躍の
こととお慶び申し上げます。

平素本会並びに母校発展の
ため深いご理解と温かいご支
援を賜り心から感謝申し上げ
ます。

本会会員となられた方は本
年三月卒業の会員三百一名を
迎えて二万四千二百余名を
数えます。その方々が国内
外において素晴らしい活躍を
されておりますことは白幡同
窓会並びに竜一高生が誇りと
するところでございます。

四月五日(土)体育館にお
いて総会を開催いたしました。
た。

協議前、在校生の吹奏楽部
員による軽快な演奏、応援団
及びチアリーダーからの熱い
エールがあり出席者一同白幡
台での青春時代を思い起こし
た次第です。

本年度総会への「招待学年」

は卒業後三十五年、二十年、
十年の全日制第三十二回、
四十七回及び五十七回並びに
定時制第二十八回、四十三回
及び五十三回の方々でした。
招待学年の方々には記念品と
して、陶芸家植竹敏氏(高
二十七回)作製の校章入り「白
萩釉錦湯呑」が贈られました。
出席者は九十余名。主な

審議・承認事項は左記のと
おりです。

①平成二十五年度事業報告及
び決算

②平成二十六年度事業計画及
び予算

③招待学年に卒業後五十年及
び十年を加える(次年度か
ら卒業後五十年、三十五年、
二十年、十年)

④協力を金をこれまでの一千円
を二千元に改める

同窓会の活動がより活発に
行われるよう「校外幹事」の
設置、招待学年の追加などを
進めてまいりました。

校外幹事の方々には、校内
幹事の方々と共に、特に、同
窓会関係資料の整理、会報の
充実などにお骨折りをいただ
いております。お陰様で白幡
会館内の一室に空調設備と書
棚を整備し、資料の整備が
着々と進められております。

会報の内容も年々充実して

まいりました。原稿依頼に対
しまして、皆様にはご多忙な
中、快くご協力をいただき深
く感謝申し上げます。

会報の発送は「年内に」を
目指し編集に努めていると
ころでございます。会員約
一万五千名の方々にお送りし
ており、その際皆様に「協
助力金」をお願いしてござい
ます。皆様の母校発展への熱い
思いから約十三パーセント、
一千九百余名の方々から協力
金をお受け致し母校支援のた
めに活用いたしております。

協力金をお送りいただく皆様
及び学年等の同窓会開催の
折、母校支援にとご寄付くだ
さる皆様に厚く御礼申し上げ
ます。

母校におきましては、「文
武両道」の教育方針のもと、
後輩たちが学習・スポーツに
一生懸命取り組んでおりま
す。

後輩たちの活動に関して、
本会は、文武を問わず、関東
大会以上の大会に出場する生
徒に対し壮行会の折に「奨励
金」を授与しております。さ
らに、今年度はチアリーダー
のユニフォームを追加するな
ど、皆様からのご支援をもと
に後輩たちの支援を行ってお
ります。

新たなステージへの
挑戦校長
小沼 光一

本会はまた会員相互の親睦
を図ることを目的とし、五年
に一度同窓会会員名簿を作成
してまいりました。来年度は
名簿作成の年度に当たりま
す。

近々皆様のお手元にそのご
案内をお送りする予定です。
趣旨をご理解いただき、ご協

齋藤佳郎会長をはじめとい
たしまして、白幡同窓会の皆
様には、日頃から本校の教育
活動に對しまして、格別のご
理解とご協力を賜り、厚くお
礼申し上げます。

私は、黒沢宣明前校長の後
任として、この四月に本校に
着任いたしました。平成二年
から十四年まで数学の教員と
して本校に勤務し、十二年ぶ
りの勤務となります。竜ヶ
崎一高での十二年の間には、
九十周年及び百周年の記念式
典、旧校舎の解体、新校舎へ

力を賜りますようお願い申し
上げます。お願いが多く誠に
恐縮に存じます。

最後になりますが、会員の
皆様の益々のご多幸ご活躍並
びに母校の発展をご祈念申し
上げまして、ご挨拶といたし
ます。

の引越、平成二年、三年
の連続甲子園出場、平成十二
年の選抜甲子園出場など、忘
れることのできない出来事や
出会いに恵まれ、充実した教
員生活を送らせていただきま
した。また、その間の教え子
たちが多方面で活躍している
姿を頼もしく感じています。
私自身も微力ではございます
が、少しでも恩返しになれば
と考え、本校の益々の発展・
充実のために全力を傾注する
覚悟でおりますので、どうぞ
よろしくお願いいたします。

さて、今春の卒業生の進路
状況ですが、九十四名が京都
大を始め地元の筑波大や茨城
大などの国立大学へ現役で
の合格を果たしました。特筆
すべきは、その合格者のうち
7割強に当たる六十九名が部
活動や生徒会に加入し、文武
両道の伝統をしっかりと引き
継いでいることです。

部活動においては、ソフトテニス部及び射撃部が茨城県代表として今夏のインターハイに出場しています。また、夏の全国高校野球大会県大会では、二回戦で第六シードの科技学園日立に逆転サヨナラ勝ちするなどし、ベスト十六と健闘しました。

なお今大会では、ベスト八に、県立高校が五校、私立高校が三校勝ち上がりましたが、県立高校五校の監督が全て本校野球部OBであったということは、まさしく文武両道を県下に示したものと考えています。文化部では、全国から約二万人の高校生が集まり、七月末に全国高等学校総合文化祭「いばらき総文2014」が、本県で開催されましたが、文芸部門の司会進行を本校生徒が行うなど、様々な分野で活躍しました。このように、充実した活動ができるのも、後輩である本校生徒一人一人を支えていただいている同窓会活動があつてのことと考えております。

すでにご存じのように、本校は、今年度から文科省「スーパーサイエンスハイスクール(SSH)」に指定されました。従来の「いばらき版サイエンスハイスクール(ISH)」

での実績を踏まえ、国の新たな指定によって、科学技術への強い興味・関心を持ち、創造性豊かで国際的な視野に立った人材を育成できるものと期待しています。また、本校で「自ら考え行動する力」を身に付けることで、大学での主体的な学びにつなげ、熱意と志を持って社会で活躍する力となるものと確信しております。

皆様の母校である竜ヶ崎第一高等学校は、一・一四年の伝統の上に、スーパーサイエンスハイスクールという日本の教育の先駆けとなる事業を推進し、新たなステージに進もうとしています。そのためにも、白幡同窓会の皆様には、本校教育活動に對しまして、さらなるご支援ご協力をお願い申し上げます。ご挨拶いたします。

総会報告

平成二十六年年度の白幡同窓会総会が四月五日に竜一高体育館で開催されました。開式の言葉に続いて、応援団とチアリーダーによる校歌と応援歌の斉唱の後に、恒例の吹奏楽部による演奏の披露があり

ました。出席者はアイガイデン下平での懇親会を含めて九十余名でした。今年度の招待学年は高校三十二回、四十七回、五十七回と定時制二十八回、四十三回、五十三回でした。

審議・報告事項は次の通りです。

一 平成二十五年度事業・決算

二 平成二十五年度会計監査報告

三 平成二十六年年度事業・予算案

四 学校現況報告
進学・部活動の状況について

【本部役員】

会長 齋藤 佳郎 (高8)

副会長 横須賀英明 (高10)

副会長 染谷 信洋 (高15)

監事 関口 広行 (高26)

監事 山田 實 (高26)

顧問 蓮沼 節哉 (中35)

顧問 野口武太郎 (中40)

事務局 矢口 博 (高29)

【校外幹事】

幹事長 大野 英二 (高11)

副幹事長 小嶋 豊 (高10)

〃 宮本 正俊 (高10)

幹事 木野内昭治 (高13)

小倉 培夫 (高20)

服部 俊夫 (高25)
倉持 正男 (高27)
篠塚 文男 (高28)
大和佐知雄 (高28)
横田 久 (高28)
櫻井 篤美 (高29)

※校内幹事は十二名です。

大野 雅之 (高30)
福田 道義 (高31)
山崎 睦 (高31)
吉田 宜浩 (高31)

平成25年度白幡同窓会収支決算書

収入総額 15,760,558円 支出総額 5,142,614円 差引残高 10,617,944円(平成26年度へ繰越)

科目	本年度予算額	本年度決算額	比較		摘要
			増	減	
1 繰越金	11,917,222	11,917,222			平成24年度より繰越 内訳 定期1 5,961,210円 常備銀行 定期2 1,653,651円 水戸信用金庫 定期3 1,253,640円 水戸信用金庫 合計増 3,048,721円 常備銀行 普通預金 預金増 0円 常備銀行 普通預金
2 入会金	1,860,000	1,806,000		54,000	全 日 制 6,000円×278名=1,668,000円 定 時 制 6,000円×23名=138,000円
3 協力金	2,000,000	1,967,940		32,060	ゆうちょ銀行扱い分 946,240円(25.3.16～26.3.6) コンビニエンスストア入金分 978,200円(25.3.11～26.3.6) 現金預かり分 43,500円
4 雑収入	5,993	69,396	63,403		13期卒業生(25,000円)×31期卒業生(34,000円)から寄付金 定期預金利息 定期0 599円 定期2 330円 定期3 251円 普通預金利息 216円 名簿売上 9,000円
計	15,783,215	15,760,558		△22,657	

科目	本年度予算額	本年度決算額	比較		摘要
			増	減	
1 事務費	250,000	208,403		41,597	
1 消耗品費	10,000	1,575		8,425	振込手数料
2 印刷通信費	220,000	206,828		13,172	総会通知印刷及び葉書代、切手代
3 旅費	20,000	0		20,000	
2 事業費	4,300,000	4,021,238		278,762	
1 総会費	200,000	136,656		63,344	総会経費補助
2 施設補助費	200,000	200,000			教室空室貸付(150,000円)、教育後援会(50,000円)へ助成
3 会報発行費	2,200,000	2,426,527	226,527		会報25号印刷代(765,912円) 会報郵送料代(1,660,615円)
4 会議費	100,000	30,500		69,500	幹事会経費
5 招待費	400,000	383,025		16,975	招待学年記念品代(白紙湯呑)
6 卒業記念品費	200,000	159,530		40,470	卒業記念品代(卒業生へ証書用紙)
7 部活動奨励金等	1,000,000	685,000		315,000	※20,000円×5,000円×市場率人数(10万円限度) 関東(東道部、除上部、射撃部、男子バレー部、男子ソフトテニス)、 全国(射撃部、剣道部、書道部、定通サッカー部)
3 慶弔費	350,000	275,000		75,000	贈別金(25年度定期運動17名)
4 予備費	10,883,215	637,973		10,245,242	応援団費(大1平、小2平)、筑波大連携プロジェクト経費(生徒前頭費、バス代)
計	15,783,215	5,142,614		△10,640,601	

平成二十七年 度

総会の案内

平成二十七年年度の総会は四月四日(土)に竜一高体育館にて開催予定です。今回ご案内の往復葉書を差し上げるのは、各卒業回の幹事の方々と、招待学年の高校十八回・三十三回・四十八回・五十八回及び定時制十四回・二十九回・四十四回・五十四回の卒業生全員です。お誘い合わせの上、多数の同窓生の参加をお待ちしています。

なお、招待学年の出席者の方には、陶芸家植竹敏氏(高二十七回)作製のオリ

ジナル校章入りの「白萩釉 鍋湯呑」を記念品として贈呈いたします。

総会終了後には、例年通り懇親会を高校下のアイガーデン下平で開催する予定です。

同窓会
だより

高校第十回

稲毛 忠臣

平成二十六年二月二十五日(火)から二十六日(水)の二日間高校第十回生としては初めての旅行会が平家の落人の里、湯西川温泉で開催されました。

野岩線「湯西川温泉駅」に

午後四時に集合し、バスにて会場の「本家伴久」に直行しました。沿線の風景は、二月初めの大雪に押し潰された農業用ハウスが目立ち、自然災害の恐ろしさと農家の皆さんのご苦労を感じながらの旅となりました。

今回の旅行会を湯西川温泉の「本家伴久」で開催することになったのは、我々第十回生の浅野容宏さんの存在がありました。今回の参加者は十九名で寂しさを感じましたが、それぞれの六十余段の石

段を踏みしめながら歩んできた現役時代を終え、更に地元でのボランティア等で十段余り歩み、あと一段で後期高齢者の仲間入りと言う訳ですが、浅野さんは今も現役の一番頭(専務)としてそこで活躍していたからです。

彼の気持ちのこもった「本家伴久」のサービスには一同大満足でした。浴衣すがたの記念写真にもその辺のところが現れているものと思います。

さて、初日は「名物の囲炉裏料理と趣深い竹筒酒の宴会」に続き「夜のかまくら祭り見物」の予定でしたが、雪国の気まぐれな天候(強風)に阻まれ、ミニかまくらに蠟燭が灯る幻想的な雪国の世界は夢の中に消えてしまいました。その分、宿の一室に急拵えの二次会場でのどぶろくを酌み交わしながら坊主時代の思い出話が弾んだことは言うまでもありませんが、行き着くところは年齢相応の「健康と年金」の話になり、それぞれ現状を容認しつつの宴になりました。

二日目は、昨夜の深酒にも拘わらず三々五々源泉かけ流しの温泉に集まり、文字どおり裸の付き合いでの同窓生の

絆を深めてから、新調した滑り止め付きの靴や簡易スパイクを装着し足元を固め、前日取りやめた「かまくら祭り」と「平家の里」を回り、午後二時頃解散となりました。団体ツアーには無いゆっくりとした時間の流れを感じる素晴らしい旅の体験をさせてもらった同窓会でした。

終わりに、本橋利久男幹事長と海老原龍夫さんを初め各幹事の皆さん、そして現地の浅野容宏さんに感謝申し上げます。



高校第二十五回

石引 督規

私たち高校二十五回卒業生も還暦を迎える年となり、七

月十九日(土) 龍ヶ崎市のアイガーデン下平にて同窓会を行いました。

我々高校二十五回卒業生は、仲間意識が大変強いのが特徴かもしれません。

常に連絡を取り合い、ゴルフや飲み会を開いています。今回の同窓会もそのような集まりの中で計画されました。

出席者も約九十人、現校長の小沼先生、白幡同窓会会長齋藤先生、同副会長の横須賀先生をお招きして盛大に行われました。

久しぶりに会う面々も、この年になると同級生が恩師か区別がつかまませんが何時の間にかやがて高校時代に戻り、昔話に花が咲きました。

入学当時、竜一高は創立七十周年に向けて新校舎の工事が行われていました。そのため一部のクラスはプレハブ教室でした。

夏は暑くて蚊が多く、冬は底冷えして大変でした。

私のA組は男子だけの殺伐としたクラスで、女子は学年に三十三人だけでほぼ男子校の様な雰囲気でした。

入学する少し前に長髪が認められましたが、服装指導はかなり厳しいものがあり、学帽は常にかぶる事が規則でし



た。
学園生活で唯一の楽しみは、体育祭だけでしたので校訓に合わせた四チーム(定時制も一チーム)で競技をしましたがこれは楽しい思い出でした。
こんな時代に一緒に学んだ仲間なので、佳境に入ると大盛り上がりでした。
これから定年を迎えていく我々ですが、竜一高と一緒に机を並べた仲間の友情はこれからも灯を絶やすことなく続くと思います。
何時も感じますが、愛校心が強く、絆も強い我ら竜一高の同窓です！

高校第三十二回

宮本 順紀



四月五日(土)に母校体育館で開催された白幡同窓会総会並びに懇親会に、高校第三十二回卒業生の一人として参加しました。校舎はすでに一新されていますが、体育館は在学当時のままで、後輩たちが披露してくれた校歌や応援歌を聴きながら、在学中のことを思い出すとともに、華やかなチャリダーたちの姿を見て、時代と共に変わりつつある母校のさらなる発展の期待感を抱きました。また、英語教師として縁あって母校の教壇に立っていた時期のことも懐かしく振り返りまし

た。

第三十二回卒業生の総会出席者が十七名、懇親会出席者が二十二名というところで、思っていたほど同窓生の出席者は多くなく、少し寂しい感じがしました。小、中、高の教員として教壇に立っている同窓生も多く、私を含め、母校の教壇に立った者も何人かいます。そう考えるともう少し参加率が高くて良かったのではないかと、自分にも何かできたのではないかと反省させられました。

しかし、懇親会に参加した同窓生から、別の機会に改めて同窓会が開けないかという意見が出され、すぐに話がまとまりました。寺田健君と足立恵司君の尽力により、七月二十五日には二十八名の同窓生が集まりました。写真はその時のものです。平成二十七年八月八日に同窓会を開催することにに向けて、力を合わせて準備を進めることとなりました。早速、足立君が第三十二回卒業専用ホームページを開設しました。第三十二回卒の皆様には下記のホームページにアクセス頂き、ぜひ都合をつけて頂ければと思います。また、幅広く同窓生をお誘いいただき、多くの皆様

とお会いできるようにできればと考えています。

第三十二回専用ホームページ
http://www.kagetora.xyz/

高校第四十七回

高藤 亮

旧制中学出身の祖父、高校出身の父(伯父も)に続く三代目として何の疑問もなく入学した竜一高。在学中は勉強もせず部活のバレーボールばかりでろくなものではありませんでした。卒業二十年で招待いただいた白幡同窓会に懐かしくなり出席しました。その席で高校四十七回卒の生徒会長だった飯塚君と意気投合し、当時担任だった川口先生の後押しもあり、同窓会の開催を決めました。

日程は決めたものの愚図愚図して連絡が遅れましたが、平成二十六年九月六日取手駅前「野の花」を会場に、現校長の小沼先生、川口先生、菊池先生にご臨席を賜り、十九名の卒業生が集まりました。

卒業アルバムを見ながら、各々の自己紹介から始まり、みんなの話が止まらない止まらない。お店の方には申し訳

なかったのですが、時間を忘れて盛り上がった結果、ほとんど料理に手をつけずに残してしまいました。

近いうちに大々的に連絡をして、今度は百人集める同窓会をやるぞと意気上がる中、無事に同窓会を終了できました。残ったメンバーで日付が変わるまで飲み明かした二次会と、参加者の皆さんには楽しんでいただけたかなと思います。

時間がないにもかかわらず、参加者への連絡や事前準備など完璧な作業ぶりだった幹事の皆さん。また参加いただいた先生方と同級生にこの場を借りて御礼申し上げます。



茨城県庁白幡会

高二十八回卒 菊地 通雄

現在、私は茨城県庁(県南県民センター)に勤務しております。今回、執筆の機会をいただいたことを機に、県庁にも白幡会があることを同窓の皆様方に知っていただければと思います、ご紹介させていただきます。

私が県庁白幡会と関わりを持ったのは、新採(昭和五十四年度)の頃、渡辺一夫さん(高十八回)から声をかけていただいたのが最初でした。その当時集まった先輩方は、江田俊樹さん(高五回)を筆頭に十人程度、口コミで同窓生を把握していたように思います。(なお、江田さんは私の直属の上司でもあり、大変可愛がっていただきました。)こじんまりとした集まりで会則などという形式張ったものはなく、白幡台で同じ空気を吸っていた仲間・親戚(失礼!)といった感じの安心感のある集まりだったように記憶しております。やはり竜一高卒というだけで、理屈抜きで妙な連帯感が生まれるのでしょうか、愛校心というか絆の強さを感じたものです。

その後、渡辺さんからバトンを受け継いだ私と小嶋裕司さん(高二十七回)が代表幹事を務め、現在は海老原徹さん(高三十六回)と糸賀正美さん(高三十九回)に代表幹事をやっていただいています。現在、県庁白幡会は、知事部局と教育庁(本庁で行政に携わっている方々が対象)等を併せて百人を超える人数となっており、県の中核で活躍している中堅・若手職員も多く、今後県政を担っていく人材となっていくことが期待されます。

県庁白幡会は、毎年一回、水戸や土浦で開いており、本庁、出先を含めて三十人位の参加者があります。参加者が少なくちよつと寂しいですが、白幡会独特の連帯感があるせいかすぐに打ち解け、白幡台の思い出話で盛り上がり、仕事上の交流にも役立っているようです。また、中山一生龍ヶ崎市長(高三十三回)にも、お忙しい中毎年駆けつけていただき交流を深めています。

これからも、多くの中堅・若手職員にも参加してもらい交流を深めていくとともに、竜一高の卒業生であることに誇りを持ち、県行政に携わっ

ていきたいと思います。

母校の思い出



高18回 堀本 敏也

半世紀前の思い出

私が竜ヶ崎一高に入學したのは昭和三十八年で、翌年に東京オリンピックが開催された。当時の校舎は木造二階建てで、床はコーティングされていない剥き出しの分厚い板が張っており、掃除はバケツの水をぶん撒けてモップで洗流すだけのものであった。

私は戦後の団塊の世代で人数が多く、クラスはA〜Fまでの六クラスであったが、一クラスに五十数名もいた。女子は極めて少なく、僅かに二十八名であった。

当時の竜一には個性的な先生が少なからずいて、洒落たニックネームがついていた。書道の大徳先生は徳をもじってバイス(Vice)と呼ばれ、英語の牧野先生はデク(dicationの略)と呼ばれた。又、学識豊かな先生が多く、生徒の知的好奇心を大いに満

足させてくれた。数学の飯野先生は、酒の飲み過ぎで喉を潰したらしくハスキーな声で、授業の合間や授業を切り上げて脱線話をよくして下さった。先生がしてくれた話の中でも世界の三大バカの建築物(ピラミッド・万里の長城・戦艦大和)のシリーズ話は殊のほか面白く、授業よりも熱心に聞いていたのを覚えている。

私は担任の先生の影響で、同じ英語の教員としての道を歩むことになり、昭和六十年から十一年間母校に奉職させていただきましたが、果たして自分がお世話になった恩師の先生方に近づけたかどうかは甚だ疑問です。

一番の思い出は体育祭である。全クラスが縦割り、校訓の誠実・協和・高潔の団に三等分され、得点を競い合うものであった。競技もさることながら、応援がすごかった。机・椅子を数段積み重ねて応援席を作り、各団とも大きなマスケットの絵を描いたものを後方に立てるのが代表的な応援席であった。どの団もマスケットの看板作りには力を注いだ。この他にも、マラソン大会、部活動、生徒会活動等の思い出は尽きない。

最後になりますが、在校生の皆様の活躍と同窓生の皆様のご健勝、そして母校の益々のご発展をお祈り申し上げます。



高18回 染谷 隆

努力することの大切さ

当時、母校は木造校舎でした。現在のように冷暖房設備がなく、夏季は授業中ノートに汗が滴り落ち、冬季は教室に隙間風が吹き込み寒さで震えた、という記憶があります。先生方は頗る厳しく礼節を重んじ、生徒は真剣な眼差しで授業に集中していました。

私は、教科では特に英語に興味がありました。一・三年生の時、英語の授業は厳しい中にもユーモアのある先生に指導を受けました。学習意欲も湧いて、定期考査で満点を取り、大喜びしたことが懐かしく思い出されます。その先生に魅了され感化されて、三年生になり、将来は英語の教師になろうと決心しました。英語科教員という目標を実現するために、大学進学の際、英米文学科を選択して勉

学に励みました。教員採用試験にも合格し英語科教諭に採用されて、目標を達成することができました。様々な高校に勤務して、無事に定年を迎えることができたことを幸いに思っています。とりわけ、母校竜ヶ崎一高に勤務したことは感無量の体験でした。

部活動は柔道部に所属しました。一年生の時は数多くの部員が入部しましたが、夏季合宿が終わると部員が減少していききました。それでも小人数で日々練習に励みました。二年生になると、大学で活躍していた先輩が東京オリンピックで優勝し金メダルを獲得して、オープンカーによる市内パレードに参加したり、祝賀会に出席した想い出があります。三年生になって、先輩方の栄光に続こうと、日々練習に励み、県南大会・県大会団体戦で優勝して、熊本で開催された全国大会に先鋒として出場したことが懐かしく蘇ります。

白幡台で学び、そこから得られた教訓は「能力の差は小さく、努力の差は大きい」ということです。在校生諸君がより一層努力し、将来大成することを期待しつつ母校のますますの発展を祈念して、結びたいします。



高33回
中山 一生

白幡台の雪月花

四月に開催される白幡同窓会の総会には、公職に就いて以来ほぼ毎年参加しています。最初は仰ぎ見るような招待学年の大先輩が出席されていましたが、徐々に身近な先輩達の顔になり、今回はついに自分の学年が招待されると思うと何か不思議な感じがします。

いま日々仕事をする中で痛感させられるのは、いかに白幡の同窓の皆さんに支えられているかということです。市制施行六十周年を迎えた龍ヶ崎市。歴代市長や議員など、白幡卒業の政治家が歴史を紡いでいます。地域の役員をはじめとする市民の皆さんはもちろん、教育委員や学校の先生、市の三役を始め、市の職員等々、白幡の力限りなしです。

違いありません。入試は、一クラス増えた伝説の年。三年間「でれすけ(友人談)」のD組。一年D組以外、二年連続の、むさ苦しい男子クラス。

部活動は、地学部、ブラバンなど放浪しましたが、結局写真部と生物部に落ち着きました。生涯の趣味となるべき写真は、高校時代に出会いました。白幡会館入口横の酢酸臭い暗室で、現像や引き伸ばしに没頭したことは、デジタル時代の今や昔話です。

生物部は、その写真部での学びの実践の場にもなりました。何より植物観察の遠足、合宿などを通した先生、同級生、先輩、後輩との交流は、まさに青春そのものでした。付和雷同の生徒会活動。三年生で入団し、一試合で終わった応援団。淡い恋心に懊悩もしました。現在の一高と比べると隔世の感だと思いますが、今思い返すと、ぬるま湯の中で大切に培養されたような三年間でした。

最後になりますが、この文章の執筆中、在学三年間の校長先生、敬愛する蓮沼節哉先生のご訃報に驚かされました。哀悼の誠を捧げ、結びたいします。

母校に感謝



高33回
有川 保

母校の思い出を語るには相応しい時間が経ったのであろうか。思い出すままに書いてみようと思う。

私の場合、教員となって母校の教壇に立ったこともあり、そのころの思い出は第四十五回卒業生が書いてくれるであろう。

私自身の高校時代の思い出は、芳しいものではないかもしれない。二学年上に兄がいた。その兄に、竜一高生は麻雀を覚えなければいけないと言われ、なんてところだと思っていたら、一部の生徒にとっては、本当のことだった。なんといつても、先生方と××××××××××××××。この伏字部分は、先輩の方々ならわかると思います。

授業からはたくさんのお話を学んだ、ような気がする。学習内容以上に、様々な人間がこの世に存在することを示して下さったのが、先生方だった。その環境は、私が教員として母校にいたときも大きく変わってはいなかった。

男子クラスの思い出は、これといってとりあげるものがない。とはいえ、とにかく楽しかったという印象がある。何でも話せる雰囲気があった。別のクラスのことになるが、フイリリングカップル5対5の電光盤を作って白龍祭でフイリリングカップルをやっていたのを思い出す。当日よりも準備中の作業の方が盛り上がりつつあったのではなかったらうか。

思い出と言うより、今の財産となっているものが、友人たちである。高校時代の私はとんでもなく嫌味な男だったのに、同級生達は、街で会ったら気軽に声をかけてくれたり、飲み会をやるから来いと誘ってくれたり、今でも交流が続いている友人が何人もいる。本当に有難いものだと思う。このような友に巡り合えた母校に感謝の念が深まるだけの時間は経過したようである。母校の思い出を語る意味はありそうだ。



高33回
海老原みどり

ハンドボールとの出会い

「女子の部活を作りたい。」という桑島先生の呼びかけで始まった女子ハンドボール部。当時の竜一には、女子の部活はありませんでした。「ハンドボール」がどんなスポーツかもよくわからないままに活動を始めました。第一グラウンドの先の坂を下ったところにある第二グラウンドで、隣の男子部を見ながらパスやシュートの練習に明け暮れた毎日。辛かった太田二高での合宿、初めて勝てた一月の大会、土のグラウンドで真っ黒になりながらボールを追いかけてました。三年で引退するまで仲間と過ごした日々はとても楽しいものでした。

高校を卒業した私は、茨城大に進み教師の道を選びました。大学でもハンドボールを続け、教師になってもハンドボール部顧問となり、教職員大会にも出場しました。三十歳までの私はハンドボール一色でした。

数年前につくばのホテルで女子ハンドボール部の三十周年記念の会が開かれました。

中心になってくれたのは、中学校時代にハンドボールを教えた教え子でした。当時の懐かしい顔やたくさんした後輩たちなど多くの人々に出会い、楽しい一時を過ごすことができました。

私は、ハンドボールで出会ったたくさんの人達から多くのことを学んできました。現役を引退してから三十余年たった今でも、私の人生に大きな影響を与えてくれます。

今は休部中とのことですが、ハンドボール部を作ってくださった桑島先生、みなで応援してくださった当時の先生方にただただ感謝です。



高48回
石川 一行

卒業して、早いもので十八年もの月日が流れました。正直に言うと、母校での思い出を振り返ろうとしても、いくつかの断片的な記憶がよみかえる程度になってしまいました。自力で過去に辿り着けることが難しくなっていました。のだと、改めて思いました。

しかしながら、当時の写真や卒業アルバムを見ると、不思議ながら、記憶が鮮明に蘇ってきます。写真だけではなく、その写真に付随するストーリーやそれにまつわる事など、自分でも感心する位の記憶が蘇ってくるのです。そして何より一番鮮明に蘇ってくるのは、高校時代に、苦楽を共にしてきた仲間たちと会った時です。今でも、当時一緒に過ごしてきたクラスメイトや部活動の仲間たちとは、少なくとも年一度集まっては過去の話を花を咲かせています。その時は、私だけの記憶だけでなく仲間たちと記憶を共有して、ありとあらゆる高校時代が蘇ってきます。そして、そのどれもが、時に辛く

苦しいものもありますが、今となつては、すばらしく良いものばかりです。二十二歳の時、高校時代の大切な仲間を失いました。そして、その父親が言っていたのですが、「高校時代の友人は生涯の友人になる」とのことでした。中学時代では未熟で、大学時代ではほぼ人間として纏まりつつある年齢で、その途中過程の人間形成の段階がちょうど高校時代であり、一緒に成長していった仲間たちだ、と。その

の当時はまだ分かりませんでした。したが、今となつてはその言葉の意味がはつきりと分かります。そして、私にとって、母校の思い出というのは、私の成長過程であり、今現在の私である、と感じています。母校での出来事・お世話になった先生方・仲間、その全ての思い出が、今の私を形成していて、そして、これからその思い出で育った私をさらに成長させていくくれるものだと思います。



高48回
及川 卓磨

「……というわけで、よろしく！」

竜一バスケットボール部時代からの良き友人である室津先生から、有無を言わず原稿の依頼が舞い込んできたのは、残暑厳しい八月頃だったでしょうか。その後、すっかり原稿のことを失念し、季節はすっかり秋。もはや冬の到来も感じられる時期となりました。

当然ながら、締切りはとくに過ぎていきます。さすがにこの段階で原稿を断ったら、

室津先生の人生を狂わせるかもしれないので、遅ればせながら筆を取った次第です。母校の思い出」とのお題をいただきましたので、ここに「超私的・高校時代の思い出トップ5」を記すことにいたします。

◆第五位・竜一合格

高校受験時、学力的に竜一に入れるかどうかギリギリのラインだった私は、公立受験の志望高を竜一にするか、安全圏の別の学校にするか、悩んでいました。公立進学を望んでいた両親の期待に応えるには、志望を下げたほうが良いと思い、悩んだ末に「竜一は無理かもしれないから○○高にする」と両親に打ち明けました。すると、それまで受験について興味なさげだった父が一言「竜一にしてみる」と背中を押してくれたのです。もしあの一言がなかったら、憧れの竜一に入学することとはなかったと今でも思っています。

◆第四位・入学初日に遅刻

一年G組の一員となった初日に遅刻したのは、高校時代最初の苦い思い出です。入学式前のホームルームで静まり返る教室に「すみません！」と入って行った瞬間の緊張感は今も忘れません。しかも、

担任は円盤投げのスペシャリストである山崎先生。鍛え上げられた肉体が醸し出す威圧感に、初日から恐怖を味わいました(注…見た目とは裏腹に優しい先生でした)。

◆第三位…屈辱の文藝

工学に興味があった私は数学が好きで、それなりに自信もあったのですが、二年の物理の授業でつまずき、理系大への進学を断念。しつかり勉強しなかった自分が悪いとはいえ、文転せざるを得ない状況に陥ったという事実は、思春期の私にとって屈辱でした。ある意味、挫折だったと思います。とはいえ、今では編集者という完全な文系職を生業としているので、人生わからないものです。

◆第二位…野球応援

三年夏の高校野球県大会で私の代は決勝まで進み、バスで応援に駆けつけました。惜しくも水戸商に負けてしまいました。自分のことのように必死に応援したことを覚えています。私自身はバスケットだったので、野球部との接点はほとんどありませんが、卒業生として竜一野球部の伝統を非常に誇りに思っています。卒業後も、夏の県大会の結果は必ずチェックしています。



高48回
高山 祥子
(旧姓: 田坂)

白幡台では、ずいぶんと牧

すし、時には球場に足を運んだりもしています。社会人になってから出会った方にも「高校野球の強い学校」として知られていることが多く、誇らしく感じます。応援歌のなかで一番好きな「ビバ! 竜高!」をいつか甲子園で聞かせてもらいたいです。

◆第一位…仲間たちとの出会い
高校時代に出会った仲間たちは、私の一生の宝となっています。卒業後二十年近く経った今でも交流があり、室津先生もその一人です。在学中から、部活やクラスといったグループの垣根を超えて友人関係を築くことができたのは、竜一の牧歌的な校風があったからこそかもしれません。仲間との思い出はここで書くことが憚られるようなことばかりなので割愛しますが、私の人生を豊かなものにしてくれている竜一の仲間たち、そして出会いの場となった母校に感謝しています。ビバ! 竜高!!

歌的な高校生活を過ごした記憶があります。

雨の日に六十余段ある石段をのぼる際に、スカートの裾が濡れて濡れてしまわないように少し短くする程度で、あまりおしゃれに目覚める機会もありませんでした。それでも、高校生になったからといって浮き足立った様子を見せる同級生もいなかった中で、非常に精神的に安定した環境でした。先生方は、私たちにいかに効果的に教えるか、あれこれと授業に工夫を凝らして下さっていました。びっしりと文字のつまったお手製のプリント、または気合を入れて写していかないと追いつかない量の板書、ときには歌謡曲の歌詞や落語の引用、等々。私は理系の科目が苦手でしたが、生物や物理の実験も興味深く、いまでも印象に残っています。

自宅から高校が徒歩五分と近距離通学だったので、入学当初はいかに「早く帰宅して課題を終わらせるか」を目標にしていました。しかし、或るとき担任の先生から「もう少し学校に残ってみたらどうだ」との意外なアドバイスを受けました。学生の自分を果たしていると思っていた私は

いささか困惑しましたが、それなら有意義な課外活動にチャレンジしてみようと、野球部の応援団のマネージャーになり、いち早く校歌と応援歌を覚えしました。さらに美術部にも入部してみました。美術部員が部長と私の二名だけだったので、部の存続を図るため、白龍祭のポスターや文集の挿絵など、学校行事の際には仕事をとってやるように努めました。

こうして、勉強と課外活動の日々を自分のペースで謳歌して受験期を迎えました。学年主任の松本君代先生はボーイズ・アンド・ガールズ・ビー・アンビシャス!といわんばかりのテンションで、常に受験生たちにパワフルなエネルギーを与えて下さいました。私もそれに鼓舞された一人です。ポジティブな気分で受験に挑むことができました。迷いや不安の多い年頃を、のびのびと過ごすことができましたのは、とても幸せなことでした。環境が大きく変わる大学生生活、また、海外へ留学した際も、マイペースに取り組んでくれたのは、白幡台での土台があったからだと思っております。



高58回
関谷 紳吾

一生懸命だった青春の三年間

高校生活の思い出は、語り尽くせません。部活動、片道十五キロの登下校、友人とのたわいない会話、受験勉強として生徒会、白龍祭、この原稿を書くに際して様々なことが思い出されます。

行事が好きだという単純な理由で、立候補し一年生の時から生徒会役員をさせていたことができました。この時立候補したことが自分の人生を大きく変えたと思います。

当時の竜一では、生徒会を中心に、先生方や協力してくれる同級生先輩後輩と様々な行事を運営しておりました。中でも白龍祭は自分の人生とは切り離せない思い出です。半年前から会議を重ね、白龍祭までの二ヶ月間は毎日夜遅くまで残って準備をしました。先輩後輩含め個性的なメンバーばかりで、皆一生懸命に参加していました。今考えると、何事にも本気で取り組める人が集まっていることが、竜一のすばらしさだと思います。一〇〇名近くのス

タツフと楽しく、時にはぶつかりながら、一つのものを作り上げた達成感は一生の宝物です。最後の文化祭のステージから見えた光景は今でも目に焼き付いています。当時の生徒会担当の岩崎先生には、本当に熱心にご指導をいただきました。心から感謝しております。

白龍祭が終わると空気が一变し、三年生は本格的に受験生になります。当時部活と生徒会ばかりだった自分は大きく出遅れていました。しかし、先生方のご指導と楽しく切磋琢磨できる仲間恵まれ、志望する大学に進学することができました。何事にも一生懸命がむしやに頑張れた竜一での思い出は、かけがえのない青春であると同時に、大人としての素地を作ってくれました。

最後になりましたが母校の益々のご発展を心からお祈り申し上げます。



高58回
石本 達也

文武両道の精神を叩き込まれた三年間。今振り返ると、

様々な出来事が蘇ります。

サッカー部では、毎日の練習メニューをみんなと考え、必死に汗を流しました。夜遅くまでその日の練習について反省をし、語り合ったことを思い出します。他の部活が大会で活躍する中、一向に目の目を浴びないサッカー部。自分達の代で絶対に結果を残そうと努力しました。その結果、県南地域の小さな大会ですが、優勝を成し遂げ、仲間と喜びを分かち合えたことが何より心に残っています。

級友との学校生活も、大切な思い出です。切磋琢磨して勉強に励んだり、白龍祭をはじめとする様々な学校行事に向けて協力したり、時には馬鹿なことをして先生に叱られたりしました。将来の夢、互いの部活動、悩み、恋愛、様々なことを共有し、支え合う仲間がいつも側にいたことで、楽しく満ち足りた学校生活を送れたのだと思います。

卒業して四年後、教師という私の夢を叶えるために、教育実習を行わせていただいた場も竜ヶ崎一高でした。懐かしさを味わいながら、急な階段を上り通った二週間。生徒であった時には、気付くことの出来なかった先生方の姿を

知ることができました。学習環境を整備し、教材研究をして密度の濃い授業を行う先生方、生徒とともに部活動に取り組む先生方、全ては生徒のために、熱い思いを持って仕事に勤しむ姿がそこにはありました。先生方には感謝しきれません。

現在、私は夢が叶って教師をしています。竜ヶ崎一高において経験し、学んだ大切なことを子ども達に伝えていくと同時に、竜ヶ崎一高の先生方を見習い、負けないよう尽力していきたいと思っています。

最後になりますが、顧問の鈴木先生、実習担当の齊藤先生、担任の矢口先生をはじめとする多くの先生方に感謝し、母校竜ヶ崎一高の益々の発展を心からお祈り申し上げます。



高58回
尾崎 翠

春夏秋冬

「春」。白幡台へ向かう急勾配の坂が桜色で埋め尽くされる情景が今でも懐かしい。合格発表、卒業式、入学式、クラス替え、きつと今も全ての

出会いと別れを見守り続けている桜。来年は見に行こうか。来年も元気に咲いてくれるだろうか。

「夏」。晴れ渡る空、忙しい蝉の鳴き声、授業中に滴る汗。理系クラスはとにかく暑かった。その暑さを掻き消すように教室の此処彼処で振り撒かれる多種多様の制汗剤の臭いに酔いそうだったのを覚えていいる。白龍祭では、所属していた吹奏楽部でのコンサートに出演しつつ、クラスの出し物も積極的に手伝った。お祭り事が大好きな私にとつて、毎年多楽楽しみな行事だった。野球応援では指揮者としての責任を全うし、見事に真っ黒焦げになった。二年生の時の沖繩への修学旅行で台風が直撃し、ホテルに缶詰めになって三食常にカレーを食べ続けたのは今では良い思い出だ。

「秋」。空気が一気に澄み渡り、色とりどりの落ち葉に敷き詰められる通学路。年に一度の球技大会は大変白熱し、急速にクラスでの絆が強くなる。毎年ここで、クラスメイトの各々のキャラクターが確立されていた。県内屈指の進学校である母校でこの時期にやはり思い出されるのは、大

学受験前の最後の追い込みだ。終業後は飛龍館に通い、毎日席取り合戦だった。今まで甘やかしてきた頭を連日フル稼働させたため、頻繁に知恵熱にもなった。でもこの頃に悟った。至って平凡な私に唯一才能があるとすれば、それは努力を惜しまないことだ。人生において、この時期が私の最盛期であったことは間違いないだろう。

「冬」。ボレロの下にセーターを着込む「腹巻きスタイル」へ衣替え。木枯らしがピューピュー吹き荒ぶ中の自転車登校はなかなかの苦行だった。自由登校が始まり年度末に向けて段々と人が少なくなりガランとした校舎は、毎年何処となく寂しげだった。センター試験では、久しぶりに皆と顔を合わせお互いの健闘を祈りあった。三月に入ると、購買前の掲示板に増えていく合格者の情報を確認することが頻繁になった。全ての卒業生の進路を見守ってきた掲示板。個人情報云々が騒がれる昨今、まだ残っているのだろうか。

卒業して九年も経つというのに、一度思いを馳せてみると、次から次へと様々なエピソードが昨日の日のように

溢れ出てくる。それだけ密度の濃い充実した三年間を過ごしたということだろう。あの時の自分がいたから今の自分が在る。改めて、竜一という恵まれた環境、先生方、先輩方、後輩、同級生、支えてくれた家族に感謝したい。

母校と私の人生



高11回
近藤 英世

新しい出会いと
チャンスがあるからこそ
人生は楽しく・面白い

竜一高(白幡台)の卒業後も、多くのすばらしい仲間・先輩・先輩の方々に巡り合え、支えていただきながら早や半世紀以上もの歳月が流れている。大学・大学院時代、企業現役時代、退任後の人生を振り返り、最後に、竜一生へのメッセージを送ろうと思う。

① 大学・大学院研究室時代…(学業と部活動を通して(人生の基礎づくり)を学ぶ)
一九六〇年代理学研究科で化学を専攻し、分子設計図面に基つき新規化合物が合成さ

れ核磁気共鳴(NMR)・赤外線分光(IR)・X線回折等の分析・同定機器を駆使して目的物が特定化され、論文にまとめられ国内外の学会で報告ができた時の喜びはこの上ない。

指導主任教授が米国大学でPhDを取得していた関係上、時代の先端研究テーマにも恵まれ英文・邦文論文作成、学会講演等を通して論理的な表現・説明法を鍛えられている。学部学生時代は、学業以外にもクラブ活動(生研湿原総合調査推進のマネージメント)、趣味の洋楽(American Hit Pops)を聴いて・唄っての活きた英語の学習及び(日本百名山)登山制覇挑戦等にも時間の投資をしているが、青春時代の多くの様々な体験は後々の人生のいろいろな所で役に立ち、人間性を豊かにし、友との絆も強くしてくれている。

② キヤノン株式会社時代…(経営の感性を磨き、優良企業構想の実現に努力する)
一九七〇年代日本は高度成長期に突入し、キヤノンもIT産業(OA機器)の開発に経営資源を重点投資し、複写機・プリンターの心臓部(感光体)の商品開発・製造分野に関与

してきている。顧客に性能・品質・価格・納期に満足をいただき、競合他社に技術・市場占有率・知的財産権(特許出願世界トップ5の堅守)等の面で優位性を築き、経営的にも収益力・成長力及び財務力の向上を常に求められている。

一九八〇年代自動車・半導体・OA機器等を対象に欧米からの貿易摩擦問題に遭遇し、キヤノンも例外ではなく、経営企画室を新組織化し、欧米各国との通商産業交渉及び(研究・開発・生産・営業)の現地拠点化つくりを促進し、(共生)の経営理念を全世界に浸透させ、企業間提携も含めて経営的イメージを極小化させることに専念してきている。

企業の経営企画部門に参画することで、その管轄範囲が桁外れに大きくなり商品開発分野は勿論のこと、法務・経理・財務・契約・工場・営業・子会社対応など、世界的視野で見渡す配慮が必要となり、幅広い勉強の機会と協力をいただいたことに感謝をしている。

取締役の評価・査定は株主総会での企業業績成果と各種経営指標を盤石にすることであり、ステークホルダー(利

害関係者)の要請にも迅速・的確に対応できることでもある。

米国シリコンバレー時代…(世界最先端の技術と企業文化と若者達のパワーを知る)

一九八〇年後半・九〇年前半のシリコンバレーのIT産業研究開発環境は(ベンチャー企業とスタンフォード大学及びベンチャーキャピタル)のトライアングル仕組みがよく機能し、また研究開発スピードも日本企業の数倍先きを行き、加えて3Dコンピュータを駆使した設計推進と品質評価及び部品の物流システムにいたるまで全てコンピュータネットワークシステムで対応する時代に既に突入していることを認識させられたのである。企業の組織体制も日本式のピラミッド型ではなく、フラット型による即決即断で経営が前に進められ、企業が淘汰されていく現実の厳しい姿にも直面するのである。

Jobs(Apple社CEO)をはじめシリコンバレーで世界を席巻する超一流のリーダーはビジョンクリエーターであり、コンセプトリーダーとしての発想が素晴らしく(時代を読み・技術を読み・夢を実現させるスピードと開拓者精

神)を異次元レベルで感じさせてくれた。

(高機能コンピュータの開発)と(日本人エンジニアの育成)を主眼にシリコンバレーの地に経営投資をしているが、貴重な体験は国内での研究開発分野でも多く活かされ実りも多いものであった。

③ 竜一生へのメッセージ…(世界の中での日本を意識して人生を)

経済・社会が急速にグローバル化されている中、文化的背景・言語体系が異なる日本で育ってきたいる皆さんも、英語で考え・意志を伝えていく機会が次第に増えるのかもしれないが、基礎教科(数学・国語・歴史)等を中心に(考える力・説明する力)をさらに強化しておきたい。

東南アジア各国の留学高校生が米国で異文化(歴史・国語(小説)・数学(公式)などの理解を深めるのにクラス内での(Debate)の時間を徹底して活用していることも参考にしてみたい。

(株)キヤノン取締役事務機企画本部長(兼)米国(カリフォルニア州シリコンバレー)コンピュータ会社社長

高16回
柳町 敬直

出版社を定年退職し、しばらくはぶらぶらとしていたが、長い付き合いの人たちからの勧めもあって、自ら出版社を立ち上げることにした。二〇一一年のはじめ、あの東日本大震災が起こるちょうど二か月前のことである。

その八月、翌年からスタートするシリーズ「日本歴史私の最新講義」の準備に没頭していた、ある暑い日の昼下がり。西新宿の事務所に、一人の男が訪ねてきた。

ズック靴に坊主頭で、ペットボトルを持っていたが、どうも酒臭い。とても、まともには見えなかったが、話してみると、なんと私の出身地、新利根村柴崎の隣村、河内村長竿の出身で、竜一高の後輩だということではないか。田中秋男と名乗った。

竜一高の話になり、当時の先生方をあだ名で呼ぶなど、いつのまにか、大いに盛り上がった。そこから打ち解けあうのに、時間はいらなかった。彼は、高校卒業以来の学生生活やら、その後の仕事ぶり

をしやべり続けた。なんでもCMプランナーとかで、死ぬほど仕事をし、財も築いたが、それも失ってしまったという。そして、文学青年で「文章」にはこだわりがある、などとのたまう。

それから彼は、しょっちゅう事務所に顔を見せ、大量のビールを飲みながら話し続けた。主な話題は、昭和二〇年代、三〇年代の龍ヶ崎市や新利根村・河内村周辺の習俗や地名・人名、遊びなどにかかわる考察で、時間がいくらあっても足りないくらいだった。

そんな彼との共同作業でできたのが『筑波の牛蒡』(A5判、二七二ページ、二八〇〇円)の一冊である。彼は、ベストエッセイスト賞を狙うという気の入れようで、私も、もちろん異存はなく、その編集作業は楽しいものであった。

じつは初版がすぐになくなり、二刷もあつという間になくなった。全国の読者や図書館からの購入申し込みもあつたが、いちばん感動したのは、彼の中学時代の友人たちが団結して販売に協力してくれたこと。これも彼の人柄の良さか。まったくもってうらやま

しい限りであった。

＊

三〇年以上前、「昭和の歴史」(全二〇巻)の編集に携わっていたが、そのとき知り合った小田部雄次氏(当時、立教大学大学院生)が、梨本宮伊都子さんの七〇数年にわたる日記の解説を頼まれている、という話を耳にした。

聞いてみると、第一級の資料で、おもしろい。さっそく単行本にすることにし、取手の彼の家の近くで、毎日のように打ち合わせ。

販売部は、せいぜい三千部程度だろうと踏んでいたようだが、『女性セブン』で記事にしてもらったこともあって、毎週五千部ずつ重版し、気づいてみれば四万五千部に達していた。編集のおもしろさを知らされた出来事である。

編集の過程で知ったことだが、小田部氏の細君は、竜一高で国語教師をしていた小田部雅子さんである。

＊

私が三〇数年過ぎた出版社には、茨城県出身者や茨城県居住者の先輩たちもいて、とくに彼らのご子息が竜一高に入学したときなど、わざわざ私の編集部に訪ねてきて会

話に花が咲くなど、竜一高を媒介にして知り合いが増え、仕事で助けられたことも多かった。

じつは私は二年生までは理科系志望だったが、三年生になって文科系に鞍替えした。三年生の夏休み以降は学校にもあまり行かず、卒業後は、一年先輩の染谷信洋さんたちの読書会に参加させていたのだ。文学にのめりこんだ。

私の人生で一番思い出に残る、そして私の一生を決定づけた高校時代であった。

元小学館

現敬文舎(株) 代表取締役

高29回
諸岡 正美

母校竜ヶ崎第一高等学校を卒業して三十八年が過ぎようとしている今、母校について寄稿させていただけますことは誠に光栄でございます。

「石段登る六十余」と口ずさみながら毎朝石段を登った記憶がよみがえります。私は高校一年生では卓球部に所属していました。伝統ある一高卓球部は当時茨城県チャンピ

オンで高山・沼崎・野口先輩など個人でも県の上位にランクされる方々に指導していただき、私もやがては全国大会に出て、スポーツ推薦でどこかの大学に入学し、体育の指導者になろうと考えていました。しかし文武両道をかなえることができず、二年からは部活をやめ勉学に励むことになりました。私は幸運にも多くの先生方に可愛がっていただき、取り分け大野英二・齋藤佳郎先生から英語の指導をいただくことができました。英語劇に参加したり、シェークスピアを英語の原文で読む楽しみも覚えました。この時の経験は現在の私のビジネスの基本となっているのは間違いないと思います。勿論流暢に外国語が話せるわけではありませんが、いわゆる度胸英語はお手のものです。広く海外に目を向けるのは大切であり、言葉は違っても心は通じるものです。現在は世界のあらゆる情報が瞬時に手に入る時代です。

しかしその場の雰囲気、匂いなどは実際訪れてみないと分からないことはたくさんあります。私はこれまで三十か国ほど訪問し、仕事で海外と

の取引をしています。今でも初めて訪問した時のことはよく覚えています。母校の後輩の皆様にも様々な国の雰囲気を感じていただきたーと思います。何かが生まれるのではないのでしょうか。最後に竜ヶ崎一高はSSHの指定校になられたようですが、目的の一つにグローバル社会でのコミュニケーション能力や発信力を身に付けるとあります。私はまず竜ヶ崎一高のホームページに英語コーナーを設けることから始めるべきだと思います。生徒が中心に広く海外の皆様と交流が広まることを期待しております。ご精読有難うございました。

株式会社諸岡 代表取締役



高34回
福永 重治

竜一を卒業して、早いものでもう三十年以上が経ちました。長らく同窓会では行方不明扱いになっていたようですが、このたび関係者の方のご尽力により、このように会報の紙幅を拝借する次第となりました。ありがとうございます。

大学生の頃に何度か、二年三年の時に担任だった小神野先生を白幡台に訪ねたことはありますが、牛久に住んでいた両親が転居してしまつたこともあり、今ではすっかり足が遠のいてしまつています。ただ、離れてはいても毎年野球部が夏の県大会で何処まで勝ち進むかチェックするのは楽しみの一つです。今回の原稿依頼を受けて、ネットの航空写真で竜一やかつての自宅周辺、自転車漕いだ通学路を見てみました。全く知らない大きな道路が出来ていたり、畑だったはずが宅地に変わっていたりで、あやふやな記憶を割り引いても浦島太郎の気分を味わいました。

さて、卒業後の足どりを簡単に説明しておきますと、居所はずっと札幌です。人よりのんびりと大学を卒業し、さらにゆつくり時間をかけて大学院を修了しました。定職に就いたのは三十歳のときです。いい年になってしまつたし、少しはまともに働かなくていかんだろと思つていたのですが、会社の事情もあり五年ほどで退職、さてどうしようかと思案していたところを大学に拾ってもらい現在に至っています。

仕事柄、高校卒業したてから二十代前半くらいの人たちと毎日顔を合わせていますが、相手の出身地や出身高校を意識することは、人よりも多いかと思ひます。最近茨城県、特に県南部出身者から「高校はどこですか?」と聞かれて、「竜一だよ」と答えると、「ええー、本当ですか? (すごい)」と少女漫画のように眼をキラキラさせたリアクションがかえってくるのがあり、逆にこちらがびっくりしてしまうことがあります。「いやいや、私の頃はそもそも高校がそれほどなくてね、たいして選択肢は無かつたし、そんなにすごい人扱いされても」と説明するのですが、どうやら今の竜一は、私が思っている以上に周囲からすごい高校扱いをされているのだなと感じています。驚き、感嘆それにうれしさがないまぜになった気分ですが、伝統校というのは、こういう強みもあるのかなと思うようになりました。

では自分が高校生の時はどうだったのだろうかと思ひ返してみれば、部活もしないいわゆる帰宅部でしたし、校外で血湧き肉踊る活劇があつたわけでもありません。何かキーワードはと考えるとすれば「のんびり」とか「気まま」とか、脱力系の言葉が想起されますし、先生方も鷹揚に構えていたと記憶しています。全体として、ゆつたりと時が流れるような雰囲気か漂っていたのではないかと感じています。何事によらず時間がかかることは忌避されがちですが、時間をかけることには大切な意味があります。長い年月をかけて形成されてきた校風が、また時間をかけながらより良きものへと発展することをお願いしてやみません。

最後になりますが、同窓の皆様のご健勝とご活躍を心より祈念申し上げます。
北海道大学大学院
農学研究科 准教授

多士済々④

初代丸紅社長 市川 忍 先生(中10回)の想い出



中10回
市川 忍

市川忍先生略歴

日本経済界屈指の実業家市川忍先生は、明治三十年茨城県北相馬郡利根町に生まれ、父親が鉄道関係技師であつたこともあって小学校を七度転校した。明治四十二年龍ヶ崎中学校入学。龍ヶ崎中学校時代、本を読みながら毎日二十キロの道のりを徒歩通学。卒業後は「伝統の関西」に憧れ神戸商大(現神戸大)に進み、伊藤忠商事に入社。その後丸

紅商店の絹糸部主任になり、三社合併等の経緯を経て大建産業に入る。戦後GHQの過度経済集中排除政策により、伊藤忠系、丸紅系、大道貿易の三分割が決まり、丸紅の初代社長に就任。「正・新・和」の精神で総合商社「丸紅」発展の基礎を築く。その後、高島屋飯田を吸収合併し、念願の三井、三菱に次ぐ総合商社第三位を勝ち取る。永年の日本経済産業界における功績が認められ、昭和三十二年藍綬褒章受章、その後、叙勲の栄に浴し、勲一等旭日重光章を受章された。

経営哲学

丸紅創立時を回顧する森長英副社長との対談において、市川社長は、現状に満足せず、新入社員に対し、次のように警鐘を打ち鳴らししている。「社風づくりも今までのところは、成功したと言ってよい。しかし、心配の種もないとは言えない。会社が誇れるようになる、期せずして安心してしまう。最初から大きな会社であったような錯覚に陥ってしまう。若い社員など、特にそうだ。サラリーマン根性に堕してしまう。創立当時の社員や、戦前の社員が「サラリーマンにしてサラリーマンに非ず」の気概を持つて日曜日でも、電報を見るために会社に立ち寄るとか、夜を徹することなど、もの数ともしなかったことは忘れたくない。遅しさが欲しい。そういうことについて、先輩が後輩に指導することも大切だ。商魂の逞しさを忘れると、三井、三菱には勝てない。丸紅創立の時には、全社一丸となったエネルギーが、事務所にも、社員にも満ち溢れていた。伸びようとする若い力、新しい力が躍動していた。それが丸紅の社風を創った。今後も世間注目のうちに、

何時までもユニークな社風を醸し出すことを祈りたいし、そうすることが、われわれ丸紅人の責任でもある。」と述べている。(社内報「まるべに」昭和三十九年十二月二十五日発行一四〇号)

日本絹化繊維輸出組合市川忍理事長との初顔合わせ

私と総合商社丸紅株式会社創立者である市川社長との出会いは、私の就職の年に遡る。「日本絹化繊維輸出組合」に、勤務して数日後、突然、一人の背の低い白髪混じりの紳士がドアを開けて入って来た。皆が市川理事長と察したその瞬間、全員が起立し、所長の楠降氏が立ち上がり「いらっしやいませ」と言って頭を下げると、皆、それに見習ったかのように一斉に頭を下げた。市川理事長の体にはオーラが感じられ、ピカピカ光っている靴が、小股で、急ぎ足でさつさと、応接室に入って行った感じがした。一瞬の出来事であった。「小さな巨人」、瞬間的にそう思った。数分後、扉が開いて、私の名前が呼ばれた。体が硬直し、応接室に入って直ぐ、市川理事長の顔を見た瞬間、自然と足が止まり、そこで、深々と頭を下げ、

何故か、顔を上げると無意識に「この度の就職ご紹介頂き有難うございました」と言葉が出てしまい、改めて深々と頭を下げていた。市川理事長は、眼鏡を通して鋭い目で、私をじっと見られ、「職場は慣れたか?」と尋ねられ、「周りの人に教えてもらって、早く慣れるように頑張ります」と答えるのが精一杯であった。すると、「早く慣れるよう頑張らなさい」と茨城弁と分かる訛言葉で激励してくれると、直ぐに部屋から出て行かれた。これが市川忍社長との初顔合わせであった。

海外視察に温情の紹介状

一九六一年八月、入社して四年五カ月、私は、日本絹化繊維輸出組合第二回欧州絹織物調査団(JAPAN SILK MISSION)の事務局代表随員に抜擢され、四十日に亘って、西独、スイス、イタリア、オーストリア、ベルギー、デンマーク、英国など八カ国を視察することになった。私の組合代表選出が発表された数日後、何の予告もなく市川理事長が来所し、私を応接室に手招きし、応接室に入ると、市川理事長は、「まあ、座りなさい、この度は欧州出

張御目出とう、初めての海外出張なので体に気を付け、勉強して来るように」とのお言葉をかけてくださり、その後、「ここに、丸紅欧州各支社長への紹介状を用意したので、何かあったら連絡すれば良い」と仰って数枚の名刺を直接手渡してくださった。私は、感激のあまり、目頭が熱くなり、手渡された名刺を見ると、「恩師のお孫さんです宜しく頼む」と書かれていたので、祖父寺田彰司に対する尊敬の念をこの名刺に込められていると思った時、涙で字が霞んでしまったことを今でも鮮明に覚えている。

JETRO 出向正式発令後、私は、高橋常務(後日中交流協会理事長)に付き添われて丸紅東京本社秘書室を訪れた。市川理事長は、笑顔で迎えてくれ、二年数カ月及びぶ單身赴任の心構えとして「日米繊維問題は、日本の繊維産業にとって非常に重要な問題であり、その点十分心得て仕事に取り組むように」と訓示された後、「しかし、体あつての仕事なので、健康には十分気を付けるように」と激励の御言葉を頂き、続いて「家族を日本に残しての單身長期赴任は、辛いこと

もあるが、皆見守っているから安心して頑張らなさい」と慰労してくれた言葉に、市川理事長の人間味溢れる温かみを感じた。日本繊維産業のために、米国繊維製造者協会の主張が根拠のないものであることが立証されるような意見書が作成できるよう市場調査、分析を行なおうと心の中で誓った。立ち話の数分間の挨拶ではあつたが、迎える時と帰る時以外は笑顔がなく、真剣な鋭い目で話されていたことに、私の任務に対する期待感が感じられた。

一九六八年日米繊維自主規制問題は、日米両国において政治活動が活発化してきた。市川理事長は、日本化繊維協会会長宮崎嶺(旭化成社長)と菅野通産大臣他関係閣僚を訪問し、米国繊維製造協会の輸入制限申請はガットの精神に反するものとして、日米貿易合同委員会その他あらゆる機会をとらえて、万全の対策を強力に進めるよう要望書を手渡し、翌年四月には、市川理事長は、衆議院商工委員会に証人として出席し、「我が国は消費者生活の充実、多様化に寄与し、国内産業に影響を与えない」と陳述

し、米国の自主規制要求が不当であることを主張した。それから三年後、日本政府は、政治的判断で輸出自主規制を受諾し、沖縄返還調印を行った。これが所謂、「糸・繊維産業で縄・沖縄を買った」と非難される結果となった。

二年数カ月及びニューヨーク駐在員活動で、アメリカ繊維製造協会の主張が根拠のないものであることを立証できたものの、最後は、我々の手の届かない政治解決になつてしまったことに諦められない悔しさが今でも残っている。

繊維業界からの離脱として ロスアンゼルスでの再会

縁あつてアメリカに進出予定の会社の日本代表・専務取締役として赴任して二年後、丁度仕事が軌道に乗ってきたころのことである。アメリカ丸紅赤羽副社長から、市川忍大阪商工会議所会頭が中南米経済使節団团长として来米し、現在ロスアンゼルスに滞在しており、寺田君に会いたいと仰っているの、ダウンタウンの丸紅まで来てほしいとの連絡があつた。翌日、丸紅ロスアンゼルス支店を訪問すると、市川会長は笑

顔で私を迎えてくださり赴任した米国における仕事状況について尋ねられたので、着任以来土地買収から、営業開始までの経過を御説明させて頂いた。市川忍会長は、中南米経済使節団の团长として公務多忙な中、数年前にお会いした時の私のロスアンゼルス職場と、電話番号をアメリカまで携行し、私のことを心配し、励ましてくださったことに改めて、市川忍会長の誠意溢れるご指導の在り方に深く敬服した。しかし、残念なことに、私が、ロスアンゼルス勤務中に市川会長の訃報があり、先生の訃報に接することは叶わなくなった。そして、松山社長とはロッキード問題もあり、再びお会いする機会も閉ざされてしまった。この時、私は、これまで、仕事一筋、全力投球で仕事が出来たのは、市川会長の後ろ盾があつての心の余裕により適切な判断が出来たのではないかと思っている。市川先生のご逝去は、その後の仕事上での試練と思ひ、これまでご指導頂いた姿勢を貫き、成功という結果に繋げなければと思っている。

寺田 典夫(高5回)

トピック①

続・白幡台の樹木

木野内昭治 高13回

前回に続いて、白幡台の樹木の続きを書いてみます。

前号は渡邊先生のアドバイスにより、幹周り3m以上の巨木を中心に記したのでしたが、それに追加する巨木がその後判明しました。幹が三本に分かれていた株立ちのタブノキで、幹周り二・六m一本と一mを超える二本からなる株の樹木です。株立ちの場合はそのうち一本の幹が2m以上あり、全体で、その基準に達していれば巨木に入ることを知りました。このタブノキは野球グラウンド三塁の後方の斜面を少し下がった所にあります。校舎からグラウンドの方向を見ると六月頃に緑が深まっている木々の中で樹冠が白みを帯びた薄い黄緑色に



タブノキ

までも幹の木肌を見せ、高い梢の枝葉も見上げられて、落ち着いた雰囲気になつている。飛龍館前の駐車場に沿ってサザンカ、サルスベリ、タカオモミ

覆われていて他との違いがはっきり目につく林冠があります。それが巨木のタブノキの花と若葉の色であり、同じく薄い黄緑色の樹冠になる台地上の高木、マテバシイ二本の花とが現わすその時期だけに見られる景観なのです。ただしマテバシイの方が少し早くにその新葉と開花のなす彩りが移り変わって行くことがその後判明してきました。その他にも白幡台の周囲を多種類の高木が取囲んでいます。特に西、北、北東側には、アカガシやシラカシ、コナラ、ヒノキ、タブノキ、スダジイ、シロダモ、ケヤキ等の高木が土塁と広い斜面に密生していて、樹冠が連なり校庭と運動場を取り囲んでいます。次は話題をかえて、校門近くのロータリー周囲からの景観を記します。整備された前庭に立つと幾種類もの樹木が数m以上の高さまでも幹の木肌を見せ、高い梢の枝葉も見上げられて、落ち着いた雰囲気になつている。飛龍館前の駐車場に沿ってサザンカ、サルスベリ、タカオモミ



ユリノキ

ジ、モチノキなどの幹が細長く伸びている。その後方にはイチヨウやクスノキの太い幹が太い幹を屋根より上に伸ばし、枝葉を広げている。校門の東方向にはタイサンボクとスギ、ヒノキ等の高く伸びた幹が目立ち、その奥土塁際のメタセコイヤはそれよりも高い。去る二月は記録的な大雪が降り積り、きびしい寒さも加わって、常緑樹の枝葉には20cmもの積雪が数日間も残ったようで、かなりの大枝が折れている。本館前広場に植えられて枝葉を大きく広げていたクスノキは二枝が折れた。高木のユリノキも長く伸び出した高枝が折れて切り戻されている。その真下が人や車の通路になつているのでやむを得ないことであつた。いろは坂の斜面の上、校庭縁にプラタナスが大きく枝葉を広げている。駐輪場を挟ん

でヒマラヤスギの大本と円錐形のヒノキ、スイリユウヒバ等のある植え込みがあり、その通路側の駐車場端をサルスベリの幹が低く伸びて占拠している。

高校在学当時の五十余年前、旧本館木造二階造り校舎の前庭に多種類の庭木が生育していたように思われる。高木のユリノキは当時、生物の足立先生がハンテンボクと教えてくれたので、現在石炭として掘り出されている裸子植物が繁栄した年代、白亜紀の後には、このハンテンボクのような被子植物の大森林が形成された時代もあったのかと想像したものでした。

トピック②

甲子園出場記念碑が完成 西村先生の碑も修復成る



甲子園出場記念碑

硬式野球部OB会長

川上

晋 高27回

甲子園出場記念碑が完成し、去る六月二十二日、野球

部関係者や現役部員八十名が参列し除幕式が行われました。

記念碑の建立は、創部一十二年、春・夏合わせて甲子園に十度出場という、野球部の歴史と伝統を讃えるとともに、これからの飛躍を期待するという趣旨のもとに、昨年から進められてきたものです。

記念碑には、十度出場した甲子園大会と春・秋の関東大会、そして、県代表として、銚子商業高校や習志野高校といった千葉県の強豪校と、甲子園出場を争った東関東大会の戦績が刻まれています。

また、西村先生の碑は、大正時代に野球部長として旧龍中を率いて、全国中等学校野球大会に連続して五回の出場を果たされた、故西村初太郎先生を偲んで建立された頌徳碑で、学生野球の父といわれる、故飛田穂洲先生の直筆による碑文が刻まれています。

三年前の東日本大震災で被害を受け、修復が待たれていました。

この二つの碑は、それぞれに意味を持って建立されたもので、野球部だけではなく、竜ヶ崎一高の歴史を後世に伝えていくものだと思います。

甲子園出場記念碑は白幡会館前に、西村先生の碑は野球部グラウンド北側に建っています。これを機に多くの方が、野球部の応援と併せて、学校やグラウンドに足を運んでもらえれば幸いです。

最後になりますが、今回の事業に際しては、ご賛同いただいた大勢の方々のご支援、ご協力を頂きました。紙面をお借りしまして御礼を申し上げます。

所蔵美術品紹介②

前号から竜一高が所蔵する美術品を順次紹介しております。現在、本館一階廊下をギャラリーにして作家略歴を添えて美術品を展示しています。来校の折には、ぜひご覧ください。

鈴木 草牛(中19回)



樹



桂林山水



浅間山雲



西村先生の碑

県立歴史館展示

七月十五日から八月三十一日を会期として茨城県立歴史館において「いばらきスポーツものがたり」展示が開催されました。

本校関係では、東京オリンピック柔道中量級金メダリスト岡野功氏(高十四回)の金メダルはじめ着用のブレザー等が展示されました。

また、「高校野球」はじまりと栄光」の部で大正時代全国大会五年連続出場に関連する「第五回龍ヶ崎中学校出場選手」写真、第五回・第六回大会参加章、本校大正八年度宿直日誌(毛筆書)、龍中野球部元老五名の写真等が展示されました。担当の学芸員のお話ですと、会期中の来館者は一万人を超え、皆さん興味深く、熱心に観覧されたということです。

歴史館からの展示品出陳に当たり、河内町の沼寄雄一氏(高二十四)、稲敷市江戸崎の田中克様には大変お忙しい中ご協力をいただきまして有難うございました。竜一高先輩の華々しい活躍の様子を県内外の方々にご覧いただく機会が得られこの上なく嬉しい限りです。齋藤 佳郎(高8回)

訃報

白幡同窓会顧問で竜ヶ崎第一高等学校第十三代校長を務められた蓮沼節哉先生が平成二十六年十一月四日にご逝去されました。

ここに、告別式で齋藤佳郎同窓会会長が述べられた弔辞の一部(部分的に表現を変更)を掲載し、心より哀悼の意を表します。

弔辞

蓮沼先生との出会いは昭和二十八年四月でした。憧れの竜一高に入学し、以後三か年、国語の授業を通して先生の深い知識と、特に、黒板に刻まれる流麗な文字に魅了されつつ、温厚なお人柄に心惹かれ勉学に勤しめる幸せな高校時代でした。

先生は、昭和十四年三月、旧制県立龍ヶ崎中学校をご卒業後、国学院大学高等師範部に進まれ、国文学を専攻されました。三年間の兵役などを経て、昭和二十一年十月、県立取手農芸学校に赴任されて、教師としての第一歩を踏み出され、昭和二十三年四月、母校竜ヶ崎高等学校に転勤されました。ご専門の国語を担当され、教科指導、学級経営に努力され、特に、進学指導に好成績を収め、保護者等か

ら絶大なる評価を得られました。

この間、四年にわたり野球部長として野球部発展にも力を注がれ、昭和四十一年夏、四十四年振りに甲子園全国大会出場の偉業を達成されました。

母校勤務十九年十一月の後境高校教頭、取手一高教頭を経て、昭和四十九年四月、江戸崎西高校長に昇任され、新設校の基盤づくりに貢献されました。

昭和五十一年四月、母校の校長先生となられ、持ち前のお人柄と卓越した見識をもって学校経営に当たり、「文武両道」の教育方針をさらに進め、進学の成績はもとより、運動部、文化部ともに県下屈指の好成績を収めるにいたりました。

母校在職中、県高野連副会長・会長を六年間務め、各大会の企画・運営に献身的に尽力され、県高校野球の発展に貢献された功績は高く評価されました。

昭和五十七年三月母校勇退後は、学校法人聖徳学園高校創設準備委員長、同高校副校長として、私学教育の充実に遺憾なく力を発揮されました。

昭和五十九年十月、利根町の教育委員に任命され、その後教育委員長を務めるなど、故郷利根町の教育発展に貢献されました。

先生の長きにわたる教育に寄せる

情熱と功績が国から認められて、平成三年十一月三日、勲四等瑞宝章を受章されました。

先生は白幡同窓会の顧問として、後輩に対し絶えず的確なご助言を授けてくださいました。

同窓会総会後の懇親会では、竜ヶ崎一高にまつわる興味深い逸話などをユーモアを交えてお話しくださいました。

短歌を嗜む先生は、私たちが自分たちの古希を祝して学年同窓会を開催した折、「白幡の丘に学びし年月は心の故郷青春の朋友」というお歌の色紙を参加者に贈ってくださいました。

先生が卒寿を迎えたときのお歌は「有り難や卒寿過ぎての日常に本も読めるし酒も飲めるし」「いつしかに卒寿になれど学ぶことまだあまたあり卒業はせぬ」ユーモアと学びへの情熱、先生の人生訓が伝わってくるお歌です。「私たち後輩、しかと肝に銘ずべし」と考えさせられるお歌です。

先生、どうか私たち後輩を雲の上からお守りください。

蓮沼先生、どうぞ安らかに眠りください。先生のご冥福を心からお祈り申し上げ、ご遺族の前途の平穏を願い、謹んで哀悼のまこととをささげ、お別れの言葉いたします。

叙勲・褒章

受章おめでとうございます

春

瑞宝中綬章

白戸 章雄さん (高13回)

元千葉県副知事

瑞宝双光章

海田 征夫さん (高10回)

元龍ヶ崎小学校長

高齡者叙勲

瑞宝小綬章

石神 由範さん (中41回)

元岩井西高等学校長

秋

瑞宝小綬章

染谷 信洋さん (高15回)

元龍ヶ崎第一高等学校長

瑞宝双光章

菅谷 (青野) 清さん (高15回)

元特定郵便局長

黄綬褒章

杉野 一さん (中45回)

杉野商店社長

藍綬褒章

飯島 (長谷川) 博さん (高10回)

保護司

横溝正史ミステリ 大賞受賞



高56回
藤崎 翔



藤崎さんは、高校卒業後「セーフィ番頭」というコンビ名でお笑い芸人として二〇一〇年まで活動していました。芸人時代から読書が続けていてペンと紙だけで表現できる小説家を目指したそうです。そして、このたび、栄えある第三十四回横溝正史ミステリ大賞を受賞しました。この受賞作は角川書店から「神様の裏の顔」として出版されました。十一月十七日には受賞報告を兼ねた一、二年生対象の講演会が本校の体育館で開催されました。詳細は学校のHPをご覧ください。

長崎国体で優勝 成年女子10M エアライフル伏射 日本新記録を樹立



高63回
蛭原 綾乃

早稲田大学四年生の蛭原さんが二年前の「ぎふ清流国体」でエアライフル立射と伏射で二冠を達成したのに続き、今年の大会では日本新記録で優勝しました。

蛭原さんは高校三年時の千葉国体でもビームライフルで新記録を樹立して優勝しています。

卒業後は県内に戻り、射撃を続け五年後の茨城国体で優勝するという次の大きな夢を追いかけるそうです。

第二回旧職員会 開催される

二年前発足した竜一旧職員会(隔年実施)の講演会及び総会・懇親会が十一月十五日に飛龍館及びアイガーデン下平で開催されました。

講演会には旧職員でもある弁護士の有川保氏(高33回)を

招き「子供達を犯罪から守る」を演題に行われました。在校生の保護者も含め、八十名を超える参加者を前に、ネットや携帯電話等に関わる極めて複雑化した犯罪の事例等を示しながら親や大人の役割など熱く分かりやすく語ってくれました。教員を続けながら司法試験の準備をされた有川氏の信念も垣間見られ有意義な講演でした。

会場を一高下のアイガーデン下平に移し、総会並びに懇親会を開催しました。現職の先生も含め、七十一名の参加者が一堂に集い、総会においては引き続き大野英二先生(高11回)に会長をお願いす

同窓会会員名簿の発行

「白幡同窓会会員名簿」は平成二年の同窓会総会で五年ごとに発行することが決定されました。また、平成二十六年年度の、同窓会総会において「会員名簿」の発行が承認されましたので、現在平成二十七年十二月の名簿完成に向けて準備を進めているところです。名簿作成業者はこれまでと同じく『サルト』です。

ることになりました。懇親会では藤沢宏至先生(中40回)の旧職員代表挨拶の後、松本君代先生の乾杯の音頭で会が始まりました。旧交を深め和気藹々の懇親の時間を大いに楽しみました。参加者の中には、昭和二十年、三十年、四十年、五十年代の白幡台で教鞭をとられた先生方も多数参加され、時間を忘れて古き良き時代に想いをはせていました。

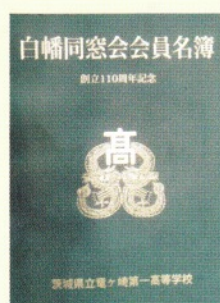
なお第三回の旧職員会は平成二十八年十一月に開催される予定です。

旧職員会様子は、本校HPで紹介していますのでご覧ください。 倉持 正男(高27回)

名簿発行までの流れ

平成二十六年四月…契約書の取り交わし
十二月…会報発送による会員の住所不明者調査
平成二十七年一月…前回名簿発行以降に同窓会へ届いた情報等の収集・整備
三月…第一回調査カード発送
六月…第二回調査カード発送
十二月…完成・発送
名簿頒布価格
四千五百円(消費税・梱包・メール便送料含む)

※名簿の申込みについては平成二十七年三月、はがきにてご連絡いたします。名簿の仕様
A4判・560ページ・並製本・一頁を二段組にしたもの



平成22年度版



事務局から

校内幹事の異動

平成二十六年三月末、四月始めの教職員人事で次のような校内幹事の異動がありました。

転出

倉持 正男 (教頭・高27)
土浦第一高校へ
足立 孝徳 (理科・高37)
守谷高校へ
坂本 秀樹 (英語・高31)
江戸崎総合高校へ

退職

飯田 栄 (英語・高17)
中村 文司 (保体・高20)

◎転入はありません。

協力金のお願い

部活動や学校行事等への援助をはじめ、会報発行や同窓会活動の活性化など、同窓会の事業運営などにつきまして、今後とも会員の皆様からご理解とご支援をいただきました存じます。

つきましては、「協力金」として二千元のご支援を賜りたくお願いする次第です。お手数ですが、同封の協力金振込用紙にて協力金の振り

込みをよろしくお願い申し上げます。

寄付金に感謝

次の方々から白幡同窓会に寄付がありました。心から感謝申し上げます。

・高二十五回同窓会
・寺田典夫さん (高5)

スーパーサイエンスハイスクール事業について

SSH担当 大西 武彦

本校は今年度から文部科学省よりスーパーサイエンスハイスクール (略称SSH) の指定を受けました。SSHとは指定期間の五年間に科学技術系人材の育成を主目的に、独自のカリキュラムによる授業や、大学・研究機関などとの連携、生徒が自ら行う課題研究など様々な取り組みを行っていく事業です。平成十四年度から始まり、現在指定校は二〇四校になっています。本年度の指定校の枠は非常に少なく狭き門でした。その中で本校が指定を受ける事が出来たのも、今まで取り組んできた教育活動が充実しており、申請書にそれらを継承発展させて行く形で盛り込むことが出来たためと確信して

います。

本校のSSHはグローバル社会において活躍できる「たくましい科学系人材の育成」を目標に掲げています。生徒たちの「目」を輝かせ科学技術者の「芽」を育てていくという願いを込め「輝く『め』プロジェクト」としました。指定を頂いてから様々な取り組みを行っておりますが、同窓会から多大なご理解ご協力を頂いたイベントを二つ紹介いたします。

まず五月十七日 (土) 本校体育館で数学者の秋山仁先生に「SSH始球式」と題した特別講演を行って頂きました。秋山先生は長髪にパンダナ、ヒゲのスタイルでメディアでも活躍されている、理数教育に関する普及啓発活動の先駆者です。講演会では数学がいかに面白く、また身近なところで役立つっているかを独自の演習器具を使って熱のこもったお話をしてくださいました。講演の前には現役野球部にも協力してもらい、秋山先生の投球による始球式を行いました。秋山先生は痛む肩を押して引受けてくださったようで、手から離れたボールは壇上を外れ、体育館の床を転がっていったのでした。

ですが、そのボールを捕球しキャッチャーに渡してくださったのが、なんと来賓席にいらした白幡同窓会会長齋藤佳郎先生でした。本校のSSHは同窓会のご理解ご協力が不可欠であることを象徴する出来事だったと感じています。(本講演会は同窓会のご理解とご支援を頂き実現することができました。)

また十月十日 (金) 午後一年生を対象にレインボーマスマティックス (略して虹マス) という特別授業を行いました。大学の先生や数学教育に先進的な取り組みをされている先生方、七名にお願いし七講座開きました。折り紙を使って幾何学を学ぶオリガミクスや、和算に親しんでいた日本人の数理文化、立体的に見える広告の描き方など、どの講座も興味深く生徒たちは熱心に取り組みました。また各教室のアシスタントを、本校を卒業し数学教員を目指す現役大学生に依頼しました。



虹マスでの立体広告の講座

卒業生はみな快諾してくれ、当日も大変熱心に仕事してくれました。ここでも同窓会会員にご協力を頂いたのです。今後のSSH事業においても、同窓会のご理解、ご協力、ご鞭撻が、不可欠であると認識しております。



秋山 仁 先生 講演会



パシフィコ横浜での研究発表

進路だより

京都大学	1 名
東北大学	3 名
筑波大学	13 名
国公立大	102 名

本校では、入学直後の導入期指導「Rプログラム」(七年目)、筑波大学合格をめざす「筑波大研究委員会」(六年目)、医学部・難関大学合格をめざす「Rマスト」(五年目)などの各種事業を柱とする進路指導企画が展開されています。その成果は年々着実に現れてきており、ここ数年、毎年安定した進路実績を残しています。さらに今年度より、三年間を見通した「進路指導プログラム」が策定され、学年の枠を越えた学校全体での進路指導体制が整い、「学校力」が確かなものとなってきたと感じています。

さて、今年度の大学入試を振り返ってみると、まず大学入試センター試験では、国語が過去最低の平均点だった昨年をさらに下回りました。国語は配点も大きく、国公立大学志望者は文系・理系問わずほぼ全員が受験するので、多

くの受験生に打撃となりました。さらに文系生徒が多く選択する科目で平均点が下がったため、特に文系生徒には苦しい受験シーズンの幕開けとなりました。また本校で理系四クラス(文系三クラス)となつて二年目の学年でしたが、センター試験で苦戦する理系生徒が多く出てしまいました。

国公立大学の出願にあつては、センター試験の不本意な結果に、多くの者が悩みに悩みました。特に後期試験は廃止・縮小の大学が相次いだため受験したい大学が見つからず、また低い得点率のため出願を断念せざるを得ない者もいて、実質前期一本勝負となつた者もいました。そのような厳しい状況ではありましたが、生徒たちは果敢に努力を続けました。ここ数年、本校では三学年スタッフだけで

平成 26 年 3 月進路状況一覧

◆国公立大学合格者数

大学名	現役	過年度	合計
東 北 大	3		3
山 形 大	2		2
福 島 大	4		4
茨 城 大	38		38
筑 波 大	12	1	13
宇 都 宮 大	2		2
埼 玉 大	2		2
千 葉 大	4	1	5
お茶の水女子大	3		3
東京外国語大	1		1
東京学芸大	3		3
東京農工大		1	1
横浜国立大	1		1
山 梨 大	1		1
信 州 大		1	1
京 都 大	1		1
熊 本 大		1	1
鹿 児 島 大		1	1
釧路公立大	1		1
茨城県立医療大	6		6
群馬県立女子大	1		1
高 崎 経 大	1		1
埼玉県立大	1		1
首都大東京	1		1
横浜市立大	2	1	3
都留文科大	2		2
静岡文化芸大	1		1
静岡県立大	1		1
岐阜薬科大		1	1
国公立大学合計	94	8	102

◆主な私立大学合格者数

大学名	現役	過年度	合計
獨 協 大	24		24
文 教 大	13	2	15
青山学院大	13	1	14
学習院大	6	2	8
北 里 大	1		1
慶應義塾大	1		1
國學院大	7	2	9
国際基督教大	1		1
駒 澤 大	21	2	23
芝 浦 工 大	12	4	16
上 智 大	3	1	4
成 蹊 大	7		7
成 城 大	2	1	3
専 修 大	12	1	13
中 央 大	8		8
東京女子大	5		5
東京電機大	16	3	19
東京農業大	15	2	17
東京理科大	26	10	36
東 邦 大	7		7
東 洋 大	20	2	22
日 本 大	43	7	50
日 本 女 子 大	4		4
法 政 大	15	2	17
明 治 大	22	5	27
明治学院大	8		8
立 教 大	24	3	27
早 稲 田 大	11		11
そ の 他	215	13	228
私立大学合計	562	63	625

なく、全職員で三年生を支援する体制が敷かれており、学校一丸となって個別試験に立ち向かいました。

その結果、国公立大学合格者は一〇二名(現役九十四名)を数え、五年連続一〇〇名以上を達成しました。中でも、京都大一名は特筆すべきであり、他にも東北大三名・お茶の水女子大三名・東京外語大一名(いずれも現役)・筑波大十三名(現役十二名)の難関大合格者が出ました。また、後期日程での合格者が二十三名おり、最後まで諦めない強い気持ちで合格につながることを実感させられました。

センター試験での文系の平均点の低下は、私立文系の受験戦線にも影響を及ぼし、全国的にセンター後に国公立を諦め私立専願に流れたり、慌てて私立の併願校を増やしたりする受験生が多くなりました。そのため難関大だけでなく

く中堅大でも、思わぬ高倍率から予想外の苦戦を強いられました。私立理系は近年の理系ブームもあり年々合格が厳しくなっています。そのような状況で、本校生も苦しみましたが著名私立で一定の成果を上げることができました。

受験結果を振り返ってみると、やはり合格を勝ち得るには、まずはセンター試験で確実に得点できる基礎学力が必要であり、そのためには日々の学習(予習・授業・復習)の積み重ねが大切になります。誰も魔法使いではないので、地道にコツコツ努力を続けるより他に道はありません。受験は人間を試します。

生徒たちには、大学受験を通して、困難に立ち向かい、それを乗り越えていく逞しさを身に付け、人間的に成長していつてもらいたいと願っています。

小澤 茂幸

先輩の語る仕事を聴く会

平成二十六年十一月一日(土)

第一学年では、文理コース選択を考える行事の一つとして、毎年この講演会が行われ

ています。今年は同窓生から七名をお招きし、人生そして竜一高の先輩として、働くや

りがいや、その仕事の面白さなどについて語っていたきました。講演後の感想を紹介いたします。

同窓生でこの講演会に講師としてご協力いただけた方がいらっしやいましたら、ご連絡いただけたら幸いです。

「学ぶ姿勢」

有川 保氏(高33回)
弁護士

毎年のように話をさせていただいていますが、毎度毎度予定している話が十分できず、生徒さんに迷惑を掛けているようです。弁護士バッジを見てもらって、少しでも法曹に興味を持ってもらえたら幸いです。

勉強はそれ自体が楽しいものであることをわかっていただけたら、そして楽しいと身をもって体験してもらえたら最高です。

「魅力度ランク最下位の県って」

青木 貴行氏(高47回)
茨城県庁

この度は貴重な機会を頂きありがとうございます。自分自身、自分のこれまでのキャリアを再確認する作業をすることが出来、とても勉強

になりました。

生徒さん達にはどれだけ有用であったか甚だ不安ですが、多少なりとも感じていただけるものがあれば幸いです。今後ともこのように呼ばれた際に恥ずかしくないよう、日々の業務にも励みたいと思います。ありがとうございました。

「人を動かす言葉」

野澤 幸司氏(高49回)
博報堂・コピーライター
・多摩美術大学特別講師

生徒たちの反応は昨年と同様、あるいはさらに淡泊に思いましたが、一年前にもあった生徒の感想文に、「自分の夢の一つにコピーライターが入りました」というものがあり、きちんと伝わって良かった記憶があります。今年もそう思ってくれる後輩が一人でもいればこれ以上ない

幸せです。貴重な機会をいただきありがとうございます。

「社会人として仕事をするということ」

松井 邦彦氏(高49回)
日立製作所

本日は大変貴重な機会に参加させて頂きましてありがとうございます。私自身、高校一年生のときには働くというイメージがありませんでした。実際に社会人として働いて十年以上が経過しますが、それまでの経験をお話しさせて頂いたできました。真剣に聞いてくれた生徒が多かったのです。今後ともよろしくお願い致します。



「営業を通して考える『働く』という事について」

墳本 寛明氏(高56回)
丸和バイオケミカル

今回は貴重な経験をさせて

頂き、本当にありがとうございます。現役高校生の前で自分の仕事や考えを話す事は初めてでしたので、とても緊張しました。話を聴いてくれた生徒たちはみんな真剣に聴いてくれたと思います。真剣に聴いてくれるからこそ、こちらにも真剣に話をしなくてはと思い熱が入りました。

生徒たちにとってこれから人生を歩んでいく中で、少しでも何か感じとって役に立っている話ができたら幸いです。私自身もこの経験を通して、いろいろと考えることができ、大変有意義な時間を過ごせたと思います。今後の竜一生の活躍を期待しています。また、機会がありましたら、ぜひ講演させて頂きたい。どうもありがとうございます。

「高校一年生の時に何を考えるか」

日野 翔太氏(高59回)
世界貿易センタービルディング

「高校一年生の時に何を考えるのか」というテーマに沿って、「自分のこれまでのこと」「今何をしているのか」をお伝えしましたが、生徒の皆さんが自分自身で「今何が

したいのか」「どんなことに興味があるのか」「これからどうしたいのか」そういったことを改めて考えるきっかけになるようなメッセージを伝えられていれば嬉しい限りです。

生徒の皆さんの思いや考えをもう少し伺いたいと思います。が、自身の十年前を振り返るとなかなか難しいというようにも思い、私としてもいろいろ考えさせられるきっかけになりました。社会人としてはまだまだこれからの立場ではございますが、本日の講演を機に、何かのきっかけ、参考となるメッセージが伝えられていれば幸いです。本日はありがとうございます。

「研究の楽しさ」

若林 康介氏(高59回)
アステラス製薬

先輩の語る仕事を聴く会に呼び頂き、ありがとうございます。昨年も参加させて頂きましたが、若い力を感じることができました。生徒とお話している中で、高校生の時どうしていたかを振り返るいい機会にもなりました。今回は本当にありがとうございました。

職員室便り

数学科主任

高野 健二 (高37回)

「探求的学習」が始まる

茨城県立竜ヶ崎第一高等学校は、平成二十六年度より五年間にわたりSSH校(スーパーサイエンスハイスクール)の指定を受けた。県南地区にある県立高校の中では、初めての指定となる。その事業の取り組みの一つとして、一年生の授業カリキュラムに「探求的学習」がある。古文で書かれた文献の中の問題を、まず現代語に訳し、それを数式の形にまとめ直す。更に、この数式を英語に翻訳して発表するという活動を行っている。生徒たちは、五、六人のグループに分かれて、一年間をかけて計画的に、協同して作業を進めていく。「数学」という枠にとらわれずに、古文や英語といった他教科との横断的な学習を行うことで、より一層各個人の学習能力を高めることを目的としている。さらに、研究の成果を年度末に発表することで、プレゼンター



数学科教員

ション力を高めることもまた一つの狙いである。ともすると、「受け身」となりやすい数学の授業が、より能動的な活動へと変化している。数学担当教員も新しい取り組みに対して積極的に関わりをもち、様々な工夫した活動をおして、竜一高の生徒がどのように変わっていくのか楽しみに見守っている。

部活動状況

男子ソフトテニス部

関東大会 第5位・ハイスクールジャパンカップ出場・新人大会団体初優勝

五月に栃木県宇都宮市にて行われた関東高等学校ソフトテニス選手権大会・男子個人の部に井上源太・奥村健太郎ペアと鈴木嶺・山口和晃ペアが県代表として出場した。井上・奥村ペアは、準々決勝で高崎商(群馬県)に敗れるものの、第五位に入賞した。関東大会での入賞は素晴らしい快挙であり、他の部員に自信と誇りを持たせてくれた。鈴木・山口ペアは関東大会に初出場でありながら、三回戦まで勝ち進み川越東(埼玉県)戦で敗退した。

六月に北海道札幌市で行われたハイスクールジャパンカップのダブルス、シングルの両部門に井上源太・奥村健太郎が出場した。ハイジャパ出場は竜一として、四年ぶり二度目のことである。この二人は、平成二十六年度茨城県ランキング第一位となり表彰された。

また、今秋十一月に行われた県新人大会の男子団体の部で優勝した。新人大会での優勝は史上初の快挙である。部員一同、平成二十七年度のインターハイに団体で出場することを目標にして日々練習に励んでおります。今後ともご支援・ご声援の程お願いいたします。

最後になりましたが、生徒の活動を支えてくださる同窓会の皆様に、この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございます。

高野 健二 (高37回)



ユニフォーム
贈呈式



本校でチアリーダーが活動を始めたのは九年前。野球応援をメインに春夏の期間限定で活動してきました。現在では文化祭や学校説明会などの学校行事の他、地元龍ヶ崎市のイベントなどにも活躍の場を広げています。平成二十四年七月には龍ヶ崎市文化会館大ホールにおいて、NHK「BS日本のうた」の公開収録があり、本校から吹奏楽部とチアリーダーが参加しました。八月の放送を見た方々からチアリーダーのパフォーマンスに賞賛の声をいただきました。

した。

チアリーダーのユニフォームは平成十九年度に白幡同窓会から、同窓会の目的の一つである「母校後援のための活動」の一環として十二着贈呈されたものです。活躍の場を広げメンバーも増えてきたこともあり、今回更に六着を贈呈されることとなりました。本年九月三十日、本校体育館において、厳肅な雰囲気の中、贈呈式が行われ、白幡同窓会副会長の横須賀英明様より、目録がキャプテンに贈呈されました。今後の活躍が期待されます。矢口 博(高29回)

部活動奨励金 贈呈式

毎年、県外大会出場部(員)に対して、大会ごとに二万円から十万円の範囲で「白幡同窓会部活動奨励金」を贈呈し経済的な支援を行っています。例年、この予算は百万円を計上しています。平成二十三年度までは校長室で校長同席のもと、校内同窓会幹事から出場部(員)に奨励金を贈呈していましたが、平成二十四年度から全校生徒による壮行会の場

において、白幡同窓会会長自らが直接奨励金を贈呈する形態に変更しました。この贈呈式の実施が、在校生の白幡同窓会への認識を深める絶好の機会となりました。今年度は五月二十六日に壮行会が実施され、男子軟式テニス部、射撃部、陸上競技部の県外大会出場へ向けて白幡同窓会会長の齋藤佳郎様より奨励金が贈呈されました。

白幡同窓会の目的の一つである「母校後援のための活動」に対し在校生の認識も高まってきています。

矢口 博(高29回)



キャリア教育の推進

定時制教頭 君山 弘

白幡同窓会の皆様には、定時制の教育活動に多大なるご支援を頂きまして、定時制教職員一同、心より感謝申し上げます。

現在、定時制には七十九名の生徒が在籍しています。本年度も成人の方が入学し、六十五歳を超える生徒が三名になりました。仕事や子育てを終え、もう一度、勉学に勤しみたいとの思いから入学を志したと聞いています。その勉学姿勢は他の生徒の模範になっています。

さて、本年度定時制では、生徒の社会的・職業的自立に向けたキャリア教育の充実を目指して、さまざまな実践に取り組んでいます。昨年度卒業生の進路状況は、四年制大学が二名、専門学校が四名、就職等が十五名、在家が二名でした。本年度も生徒の多様な進路ニーズに応えられるよう、教職員が丸となって、生徒とともに奮闘努力していきます。

若手教員を中心に総合的な学習の時間やロングホームルームを、進路実現に必要な

基礎知識の習得を目指す内容へと、大幅に刷新しました。

毎年継続してきた全校生徒対象の進路ガイダンスでは、大学・専門学校六校より講師を招聘し、説明会や質疑応答で理解を深めました。また就職希望者には現在の求人状況説明会やコミュニケーション力を高めるための模擬面接を実施してきました。

さらに、本年度から県教育委員会と連携したNPO法人地域若者サポートステーションのご協力を得て、四年生を中心にキャリアアカウンセラーによる個人面談や、講師によるキャリアセミナーを開始しました。セミナーでは自己分析やグループでの話し合い、自分に適した職種について考えるなど、生徒にとっては実り多い体験となりました。

これらの素晴らしい体験を通して、自己目標の実現が達成できるように、生徒と教職員が同じベクトルで、キャリア教育を推進してまいります。

キャリアサポート プラン

定時制教諭 石塚 芳幸

六月十一日と十七日の二日間にわたり、定時制課程の生徒を対象として、水戸地域若者サポートステーションの運営団体である「NPO法人すだち」の講師によるキャリアサポートプランが実施された。

十一日には、今年度卒業予定の四年生十九人に対して、一人ずつ二十分に渡ってNPOスタッフによる個別面談が行われ、生徒からは「将来の不安が少なくなった」「必要な資金や学校の内容など、具体的なアドバイスがもらえた」「親身になって聞いてもらえた」などの感想が寄せられた。十七日には、三年生の卒業見込みの者六名を交えて、NPOスタッフによる講義・ワークショップ形式によるキャリアセミナーが実施された。生徒たちが自分の長所や得意なことを分析し、それをもとにして、自分の長所にあった職業を調べるという作業が進められ、さらにその内容をグループで話し合っているという構成であった。生徒からは「自分なりに就職を考

えるうえで非常に役に立った」「自分に自信がついた」といった感想が寄せられた。ここ数年の変化の激しい社会情勢の中で、生徒たちの中で、安定した将来設計を築きたいという気持ちが年々強くなっているように感じられる。そのような気持ちを受け止められる今回のような企画を、総合などの時間を利用して進める必要性が痛感された。



性に関する

講演会

養護助教諭 久保 美津

九月三日龍ヶ崎済生会病院産婦人科医陳央仁先生をお迎えして「自分(いのち)を生きて愛し愛されるために」と題して保健講話が行われました。陳先生の講演は、事前アンケートから始まり、講演、事後アンケート・感想といった構成になっています。興味深いのは事前のアンケート結果で男女差はありますが、自分のことが好きかの質問に六、七割の生徒

たちが自分のことが好きではないと回答しています。定時制の生徒たちの中には、自己肯定感の低い生徒たちも多くいるということです。そうした背景を持つ定時制の生徒たちにとって陳先生のメッセージは、自分はかけがえのない存在であることを気づかせてくれる内容が満載です。親の愛を通しての自己肯定が生まれ、授かったいのちが大切にだからこそ相手のいのちも大切に思えること、そしてその先に生命を生み出す性があること、まさに心の性教育であると感じます。また、現代の性の危険性についても分かりやすく伝えていただきました。二時間という長い講演でしたが生徒一人一人が陳先生の言葉を真剣に聞く姿に心打たれました。生きてるだけで一〇〇点満点・あなたはあなたのままでいいのだ! 陳先生のこの言葉が生徒たちの胸に響くすばらしい講演でした。

生活体験発表会

定時制教諭 市川 貴

平成二十六年茨城県高等学校定時制通信制生徒生活体験発表大会が、十月四日(土)

に土浦第一高等学校で開催されました。今年の参加校は十七校、発表生徒は二十二名でした。

本校からは三年生の米澤朋晃君が代表として参加しました。米澤君は夏休み中から発表原稿を準備し、何度も推敲を重ねて内容を練り上げていきました。九月からは発表の練習です。大会では発表の内容だけでなく発表態度も評価の対象となるため、原稿の暗記は必須の条件です。何度も練習を繰り返し、万全を期して本番に臨みました。

大会では練習の成果を十分に発揮して、説得力のある素晴らしい発表をすることができました。残念ながら全国大会への進出はなりませんでしたが、聴衆を惹きつける発表になりました。

ご支援くださったPTAおよび同窓会の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。



定時制奉仕作業

定時制教諭 高野 陽輔

七月十六日午後六時半、定時制一年生約二十名がゴミ袋と懐中電灯を片手に元氣よく石段を降り、二班に分かれ龍ヶ崎市内のゴミ拾いを行いました。

目立ったのはタバコの吸い殻でした。吸い殻はいたるところで散見され、自動車からポイ捨てされたと思われるものも少なくありませんでした。生徒はその量に驚きながらも黙々と拾っていました。

その一方で、缶や袋などの比較的大きく、目に付くゴミはほとんどありませんでした。これは、本校近隣の住民の皆様が日頃からボランティア清掃をしてくださっていることや、龍ヶ崎市の「わがま

ちクリーン大作戦」など啓発活動の成果だと思われます。綺麗な街であるためには、ゴミを捨てない、そして拾う誰かの存在がある。このことを生徒は肌で感じ、地域とのつながりを知る素晴らしい機会となりました。



編集後記

本号から紙面をタブロイド判からA4判に一新しました。

会報は約一万七千名の会員の皆様にお届けしています。読みやすく、多くの方に興味

関心を持っていただける会報を目指して、これからも紙面を充実させてまいります。

倉持 正男 (高27)